
魔法少女リリカルなのは 異世界から来た少年

牛井680円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 異世界から来た少年

【Nコード】

N0105N

【作者名】

牛井680円

【あらすじ】

どこにでもありそうな世界…
そこに住む少年はある日、巨大な光の波に巻き込まれ別世界へと飛ばされた。
飛ばされた衝撃で記憶を失った少年はその世界でどうなっていくのか…

小説初心者です。誤字脱字やおかしな表現があるかもしれません

プロローグ（前書き）

初めてです！

文力皆無ですので意味がわからない所があるかもしれませんが。

そのときは問答無用でおっしゃって下さい

m (((m

プロローグ

とある世界

その街にはどこにでもいそうな人々がいた

「ふあゝあ…疲れたな…」

この少年もこの世界の住人だった

「帰ったらさつさと…ん？」

少年はなにやら胸騒ぎがしていた

「なんなんだ？この感じ…嫌な予感がする…早く爺ちゃんの所に帰ろう」

少年は帰路につく為に道を曲がった。道を曲がるとそこには…

「なんなんだよ…あれ…光の…波？」

その巨大な光の波は街を飲み込んでおり、もの凄い速さで近づいていた

「ヤベツ！逃げな…うわあああ！！」

少年は走って逃げようとしたが光の波がはやすぎて巻き込まれてしまった

地球 海鳴市某所

静かな住宅地にいきなりズドンという音が響いた

「痛ったゝ（泣）何なんだよ…いきなり…」

落ちてきた少年の周りには大きなクレーターができていた

「うわっ…すげえクレーター…あれ？そう言えばなんで俺はここに…？あれ！？……」

こうして少年の物語は始まっていくのだった

プロローグ（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

???「『いかがだったでしょうか？』じゃねえよ！まだプロローグじゃねえか！」

作者「え〜（「」）」

???「顔文字使つな。キシヨイ」

作者「キ…キシヨイ！？オヤジにも言われたこと無いのに！！」

???「当たり前だ。お前自分のオヤジに顔文字使った事無いだろ」

作者「そうだっけ…？そんな事より何か言いたかったんじゃないの？」

???「強引だな…まあいい、まずは主人公の俺の名前がでてないだろ！」

作者「まずつて…他にもあるのね（泣）プロローグだからに決まっているだろっ」

???「他の作者さんは出している所もあるぞ」

作者「なん…だと？」

???「他には…原作キャラが出ていない。デバイス系が決まってない。強引過ぎる。読みづらい。さらに…」

作者「もういいよ！！（泣）目の前が曇って何も見えないよ！！」

???「だろっな。とりあえず今はこの位にして…さっさと答える作者」

作者「うう…作者の扱いがひどい…（泣）順番に答えると原作キャラやデバイスは話上出しづらかったので、次回以降にまわってもらいました。話が強引過ぎたり、読みづらかったりするの私の文才力が無いからです！すみませんでした！！」

???「威張るな！！」

作者「ぐべらッ！」

???「ふう…気絶したか…それじゃあまだプロローグなのですが

感想などお待ちしています。誹謗中傷などは、作者の精神が本当に脆いのでできる限りオブラートに包んであげてください。それでは
「！」

第一話 始まりはいつも突然

突然過ぎるのもどうかと思うけど？（前書き）

第一話です

第一話 始まりはいつも突然 突然過ぎるのもどうかと思うけど？

地球…海鳴市某所

いきなり空から降ってきた少年は墜落地点から少し離れた場所に移動していた

「ここは…どこなんだ？」

少年は立ち止まり、周りを見渡した

「なんで…」

少年…ライトは考えていた。何故自分がこんな場所にいるのか、何故自分の記憶が無いのか、何故記憶が無いのに名前を覚えているのかしかしライトはすぐに考えるのを止めた。

「めんどくさい…」

ただ単純にめんどくさくなったからだ

「これからどうしようかな…？」

ライトはふと腕を見てみると…

「腕輪…？」

翡翠色に光る宝石が一つ埋め込まれた腕輪がついていた

「何だろ…これ…」

ライトが宝石にふれるといきなり眩い光が放射された

「!!!？」

起動完了

光が収まり目を開けると…

「……………」

特には変わってなかった

「気のせ…」

システム・オールグリーン

『マスター認証を行います。名前をいつてください』
「!?!」

いきなり腕輪がしゃべりだした

『マスター認証を行います。名前をいつてください』

「へっ!?!ラ:ライト・レイフォール:」

???? 『マスター名称:声紋:照合開始:一致を確認:デバイス機能を開放:おはようございます。マスター』

「うえっ!?!お:おはよう:?!」

『どうかしましたか?』

「お前:何なんだ?」

ライトは驚きながらも質問した

『私は腕輪型インテリジェントデバイス VP・DSW:通称デバイスニーです』

「そ:そうですね:ご丁寧にも:」

『敬語はやめてください。あなたはワタシのマスターなんですから』

「あ:ゴメン」

何故かデバイスに注意されたライト

「:それじゃあ此処:どこかわかるか?」

『ここは海鳴と呼ばれる集落ですね』

「:.....」

『どうかありませんか?』

「いや:地名を言われてもね」

『変な人ですね:聞いてきたのはあなたでしょう』

「まあそうなんだけど:記憶が無いからさ:」

『なるほど:フツそんなんで記憶喪失が治ったら誰も苦労しません』
『よ』

「なっ!?!」

デバイスニーはライトの考えを軽く笑った

『そんなことよりバリアジャケットを創りましょうよ』

「そんなこと!?!」

デステイニーの中ではライトの記憶よりもバリアジャケットらしい
「自分のマスターの記憶よりもバリアジャケットが大切っておい…
(泣)」

『ジャケット』 ジャケット』ト』 ジャ〜ケット ジャケット』
「わかったから歌うな!! (泣)」

デバイスに泣かされかけていた…
数分後

「そもそもバリアジャケットってどうやって作るんだ？」

『マスターが想像した物を読み取って、それを具現化させて創りま
す』

「あゝ要は考えろって事ね…」

- 30分後 -

「よし!これだ!!」

『それでは読み取ります』

その瞬間周りが光に包まれた

光がおさまるとそこには白と黄色の騎士団の様な服を着たライトが
いた

「良いじゃん」

『問題無いですね。それでは次は武器の形をお願いします』

「それはさっきついでに考えた」

また瞬間的に光が発せられ光がおさまると

「銃剣だ!」

『珍しい武器ですね』

「何かカツコイいしさ」

『それにしてもよく記憶も無いのにこんな物をリアルに考えつきま
すね』

「あ……なんでだろね(笑)」

どことなく明るいライトだった。しかしいきなり周りから変な感覚

がしだした

「なんだ！？この感じ…」 『どうやら結果が張られたようです。向こうでそこそこ高い魔力反応が2つあります』

「なるほど…とこで俺の魔力ってどれくらい？」

『ランクで言うとSS+ですね』

「それって高いのか？」

『マスターの年齢で言えば有り得ない程高いです』

「チートだな…（苦笑）それじゃあ向こうの反応は？」

『二つともAAA+位ですね』

「俺よりは？」

『下です。それよりも行くんでしょう？急ぎましょうよ』

「そうだな。空飛べるよな？」

『当然です』

「なら行くぞ！」

ライトは飛び上がって魔力反応のある方向へもの凄い速さで向かった

第一話 始まりはいつも突然

突然過ぎるのもどうかと思うけど？（後書き）

作者「第一話終了!!」

ライト「今回もだいたい短いな」

作者「元々メール機能だけで書いてたからね。短い分読みやすいだろ？」

ライト「話が跳躍し過ぎて読みづらくなっているということも考えられるぞ」

作者「(。(;)」

ライト「言葉が無いからって顔文字にすんな」

作者「だ…大丈夫だろ!きつと……」

ライト「最後弱々しいな!」

作者「仕方ないだろ!!自分ではわからないし!ただでさえ文章力皆無なのに!!(泣)」

ライト「わかったわかった。汚いから泣くな」

作者「うう……グスツ」

ライト「そんな事より次回は？」

作者「今回はライトの設定などを入れたいと思います…」

ライト「本編は？」

作者「先におかないとライトの能力が分かりづらいたろ?本編はその後」

ライト「なるほどな」

作者「読んでくださった方々、感想など待ってます!!」

ライト「厚かましい作者ですがよろしく願います!」

作者「おい!それを言うなよ!!」

作者/ライト「それでは!!」

オリキャラ設定(前書き)

オリキャラ設定です

オリキャラ設定

設定

ライト・レイフォール

推定9歳

魔力SS+

魔力光 銀

魔力変換資質 風 / 光 / 雷

レアスキル

SEED

SEED

視覚や聴覚、動体視力が限界を超える
何やら色々条件が必要らしいが…

容姿

姿はTOAの短髪ルークで、後ろ髪をヒモで少し縛っている。
色は薄い緑。

バリアジャケットはTOWRM2の守護騎士シリーズのようなもの

ある時大規模な次元震に巻き込まれ飛ばされてきた(てか落ちてきた)その時の衝撃で名前以外の記憶が消えた。

性格

どこにでもいるお気楽バカ。だが状況理解力は高いのでシリアスモードの時はシリアスになる。結構前向きな性格で純粹少年。悩み事を隠してもほとんどが顔に出る

彼には重大な秘密が…

使用デバイス

デステイニー

待機形態…腕輪型

セットアップ時…銃剣

女性の声で主人公がこの世界に落ちてきた時から何故か一緒にいた。

使用モード

ブレード

普通の銃剣

ある程度の砲撃が打てる。

フアング

少し小さくなった二本の銃剣

射撃は小さい魔力弾の乱射位しかできなくなるが行動スピードが上がる。

バスターソード（ランチャー）

身の丈位までデカくなった武器

バスターソードは銃剣の銃の形を捨て大剣にしたもの、射撃能力は無い

バスターランチャーはソードと同じサイズだが、ソードとは逆に斬撃能力が無い代わりに射撃能力に特化している。剣先から砲撃を撃

つことが出来るが、より強い砲撃を撃つときは刀身が真ん中から下に別れ、中から別の銃口を出し、それを使う。
スピードは3モード中最遅だが一撃が重い

フルドライブ

トランザム

自分の魔力をオーバードロードして身に纏い、スピードやパワーなどの能力を極端に上げる

しかし、自分の体がまだ未熟である事や負担が半端ないため使用時間は5分間と決まっている

さらに使用するとしばらくの間まともに魔法が使えなくなる

使用技

他の人の魔法をパクったり、その改良版の魔法を扱う

テイルズの技や術も使える（魔神剣とか蒼破刃とかe t c .）

オリキャラ設定（後書き）

ライト「……」

作者「どした？」

ライト「容姿がルークって…どんだけテイルズ好きなんだよ」

作者「良いじゃん。ルークかっこいいじゃん」

ライト「否定はしないが…って魔力変換資質多すぎだろ！」

作者「風、光、雷かっこいいじゃん！！」

ライト「お前が厨二病患者だということがわかるだろ！！」

作者「なにを言っている！厨二病患者にそこまで悪い奴は居ないんだよ！！」

ライト「あくまで『そこまで』だがな」

作者「そりゃ…ねえ？」

ライト「俺に聞くな…それよりもあの性格は何だ？いままでの話でお気楽バカっぽい事したか！？」作者「ちゃんとみた？『シリアスムードではシリアスになる』って。プロローグは微妙だけど第一話では記憶が無くなった直後だからお気楽出来ないでしょ」

ライト「まあ…確かに…」

作者「大丈夫！今後バカになってもらうから！！」

ライト「それは嫌だ！！」

作者「え…まあいいや。勝手にバカっぽくするから」

ライト「やめろ」

作者「ライトの技は基本的にテイルズだね」

ライト「テイルズ系か。するといずれは…」

作者「秘奥義使えるかもね」

ライト「かもかよ…」

作者「次は…レアスキルとフルドライブ？」

ライト「レアスキルがSEEDでフルドライブがトランザムってガンダムも入れんのか…」

作者「強くな？」

ライト「チートすぎる。とりあえず次回は？」

作者「予定通り原作キャラを出そうと思います！」

ライト「そういえば時期がわかるような事一回も書かれてないぞ？」

作者「忘れてた…时期的には無印だよ」

ライト「じゃあジュエル・シードか…面倒だな〜んで？俺はどっち

サイド？」

作者「そこんところは次回で」

作/ラ「それでは！！」「」

第二話 桃色の砲撃と黄色の閃光

この人達は本当に子供ですか？（泣）（前

第二話です。

第二話 桃色の砲撃と黄色の閃光 この人達は本当に子供ですか？（泣）

今魔力反応がある方向に飛んでるけど…

空飛ぶの気持ちいい

ずっと飛んでいたいよ

『ダメですよ。さすがに魔力を使いすぎます。何よりも私が疲れま
すから』

こいつ…何気に自分主義か

『そうでなくては生きていけませんからね。このご時世』

「な！？人の心を読んだだと！？」

『安心してください。すべて声に出ていますから』

「……………」

『ほらほら、もうすぐ着きますよ』

なんやかんややってると茶髪と金髪の二人の少女と…

「猫？」

『形状からして猫ですね』

「猫ってあんなにデカかったっけ？」

『そんなわけないでしょう。猫から暴走した魔力の反応があります。』

おそらく膨大な魔力で巨大化しただけですよ』

「それよりもよく寝られるな…デカ猫」

『おそらく二人のどちらかが攻撃を加えたのでしょ』

「ですよね〜」

すると寝てた猫が起き上がり何処かへ行こうとした

「おっ！猫が起きた」

それを見た金髪の少女は慌てて猫に向かおうとする。

しかし茶髪の少女が金髪の少女に砲撃を撃とうとしていた

「あ！危ない！！」

ライトは無意識に金髪の少女の方へ向かっていた

ズドンという音と同時に煙が上がった

「あ…当たった？」

「気をつけて…まだかもしれない」

「う…うん」

茶髪の少女の近くにいたフェレットはその少女に注意を促し煙が晴れていくのを待っていた。そして煙が晴れてそこに居たのは…

「不意打ちとはあぶねえな…シールド張ってなかったら怪我してたぞ」

「えっ!？」

「いつの間に…!」

茶髪の少女とフェレットは突然現れたライトに驚いていた

ライトは金髪の少女の安否を確認する為に振り返った

「大丈夫か？お前」

「……え!？あ…」

「…!（コイツ…なんて悲しそうな目をしてんだ!？）」

金髪の少女はいきなり声をかけられ困惑したような表情をしていたがどこか悲しそうだった

「にゃ〜」

そんな事していると猫は外に出ようとしていた

「…あつ…!」

「デステイニー！封印…出来るな!？」 『了解です！シーリング・モード!』

二人の少女とフェレットが猫の突然の動きに気をとられてる隙にライトは猫に銃剣の剣先をむけた

『呪文は頭に自然と出るはずです』

「わかった! ……ギル・ギム・ガム・ゴウ・グフォ! ジュエル・シードNo. ?! !」

『封印!』

剣先から放たれた光は一直線に猫に向かっていき体にあたるとそこから青いひし形の宝石のような物が出てきて猫の大きさが元の子猫

になった

「こんなもんか？」

『ですな』

「それじゃあ…っ」と

ライトは事情を聞くために金髪の少女の元へ行こうとする

「あのさ…聞きたいことが…」それを返して！」「のわっ！？」

しかし茶髪の少女が砲撃を乱射してきた

「ちょ…まっ…これじゃ…近づけない…とお！！？」

『ここは一時撤退した方が良さそうです』

「でも…あの子が…あれ？」

『どうやら撤退したようですな』

「はや！！」

『マスター！』

「わかったよ！！」

ライトは砲撃を上手く避けながらその場から逃げた

「ハアハア…逃げきったか？」

『反応はありません』

「何なんだよ…アイツ…あれじゃ白い悪魔だよ…」

『MSですね。わかります』

「もびるすーっ…？なんだそれ？」

『お気になさらずに。それよりもこれからどうしますっ…』

「ん…あの金髪の女の子を探して戦ってた理由を聞こうと思っただけど…」

『白い方には聞かないんですね』

「悪魔だからな」

『なるほど…』

「それにこれについても聞かなきゃならないし」

ライトはポケットから先ほどの青い石を取り出した

『もの凄い魔力が感じられます』

「こんな危険なものを集めてる理由がきになるし」

『それで？理由を聞いてどうするんですか？』

「手伝えたらいいな〜って思ってる」

『良いんですか？彼女が必ずしも良い行いをしているとは限らないんですよ？それにあなたの記憶はどうするんですか？』

「そこは大丈夫。悲しそうな表情してたけど、あの目は優しい奴の目だった。それに記憶は意外な事で戻るかもしれないし…それだつたら記憶よりも目に見える事をやりたいんだ」

『…わかりました。しかし彼女を探す方法は考えてあるのですか？』

「あつ……………忘れてた」

『ハア…まったくあなたは…しょうがないですね…私も確証が無いのですが、ここからかなり離れた場所に結界の反応があります。おそらく彼女はそこにいるのかと思います』

「なに？本当か！？なら今すぐ行くぞ！！」

『ちよつと待つてください』

ライトは勢いよく飛ばうとしたがデステイニーによって止められた

「なんだよ…」

『どうせ行くなら転移魔法の練習をしながら行きましょつよ』

「ん〜そうだな。でもどうするんだ？」

『転移座標の設定は私が入りますから、魔力を込めてください』

「よしわかった！いくぞ…転移！！」

ライトは転移魔法を使って金髪の少女の元へ向かった

第二話 桃色の砲撃と黄色の閃光

この人達は本当に子供ですか？（泣）（後

作者「……m（――）m」

ライト「いきなり無言で土下座してどうした？」

作者「いや……ちょっと二点ほど変更するから前もってお詫びを……」

ライト「二つもか！？……んでその部分は？」

作者「まず一つ目は少しでも読みやすくするためにあとがきと同じく、本編の「」部分の前に名前を入れようと思います」

ライト「なるほど……誰がなに言ってるかわかるようにするためだな」

作者「これは次回からしようと思います。そしてもう一つ……ライトの性格をお気楽バカからマイペースにします！！」

ライト「はあ！？性格をいきなり変えるのかよ！！」

作者「だって……今後の内容考えてたらお気楽バカなんて書けなかったんだよ……」

ライト「所詮お前はその程度の人間だったということだ」

作者「ぐっ……心が痛い……」

ライト「それじゃアオリキャラ設定も書き直すんだな？」

作者「いや～内容かえたらあとがきも変えなきゃいけないからしばらくは無しの方向で……」

ライト「な お す よ な ？」

作者「はい……いつか必ず」

ライト「まったく……」

作者「本当にすみませんでした！」

ライト「あと……あれは原作キャラは出たといえるのか？」

作者「まあ……ライトから見てまだ知らないわけだしね。次回にはちゃんと出せるよ」

ライト「……まあいいか」

作ノラ「……それでは……！！」

第三話 協力

ドラえもんって昔は黄色だったんだね。

この間知ったよ（前

第三話です

よじやくできた…（疲）

第三話 協力

ドラえもんって昔は黄色だったんだね。この間知ったよ

とあるマンション

金髪「ハア……」

金髪の少女「フェイトはため息をついていた。理由は二つ 一つはジュエル・シードを回収出来なかった事、そしてもう一つは不意打ちから守ってくれた自分と同じ位の少年である

フェイト「（なんで私守ってくれたんだろ……）」

赤い狼「フェイト！そんなにクヨクヨしないでさ！次があんだろ次が！」

フェイト「アルフ…そうだね…」

アルフ「それともいきなり現れた男の方が気になるのかい？」

フェイト「…なんで助けてくれたんだろって…」

アル「ふん…」

そしてしばらく沈黙した空気になった。

しかしその沈黙を破るように銀色の魔法陣が部屋に広がった

フノア「…!?!?」

そしてそこから現れたのは…

ライト「うわぁ…気持ち悪い…」

ライト side

ライト「うわぁ…気持ち悪い…」

デステイニー「酔ったんですね。いきなり魔力を全開で流すからそうなるんですよ」

ライト「うるさいな…仕方ないだろ…初めてなんだから……あっ…

いくらかマシになつてきた」

それにしても…これ…どこの部屋？ちゃんとあの子のところに着いたんだろつか

フェイト「あの…」

ライト「ん？ああ…よかった、ちゃんと着いたんだな」

いや〜よかったよかった。これでまったく知らない人だったらものすごく気まずくなるから…

アルフ「おい！お前どうやってここにきた！ここは結界を張ってるんだぞ！」

うるさいな…猫耳（？）女

ライト「普通に転移してきたぞ？」

アルフ「座標もわからないようにしてるのに！？」

デス『妙な結界反応の中心を座標にしました』

フノア「！！！？」

おゝ見事に固まったな

アルフ「そんな…アタシが張った認識妨害の結界がデバイスに破られるなんて…」

デステイニー『高性能ですから』

ア「……（泣）」

あゝあ猫耳女泣いちゃったよ

ライト「あまり人弄りすぎるなよ」

フェイト「…あなたはどうしてここに？」

そうだった…忘れてた。最近もの忘れ酷いな…

デステイニー『マスターの場合は物忘れの域を超えてますがね』

ライト「うるせえほっとけ。それよりもここに来た理由だったっけ？話がしたいと思つてな」

フェイト「私と…？」

ライト「ああ…どうして一人で…猫耳女もいたな。二人でこんな物を集めてるのになつて」

フェイト「それは…」

ライト「これは封印しててもわかる。この石には膨大すぎる魔力が込められている。そんな代物を女二人で何故、危険を侵してまで集めてるんだ？」

アルフ「そんなこと言える訳無いだ…」

フェイト「アルフ！…この人なら大丈夫かもしれない」

アルフ「でも…」

フェイト「大丈夫だから」アルフ「わかったよ…」

猫耳女をフェイト…だったっけ？が宥めてる。猫耳女が保護者じゃないのか？

そしてフェイトは自分達が集めている理由を話してくれた

ライト「母さんのため…か。なるほどね」

フェイト「うん…私は母さんの役にたきたいの」

ライト「……わかった。俺も協力するよ」

フェイト「え！良いの!？」

ライト「ダメか？」

フェイト「う…ううん…ありがと。でもどうして？なんで手伝うなんて…」

ライト「人を助けるのに理由がいるのか？」

フェイト「え…その…」

フェイトが何故か戸惑い始めた

ライト「ん…理由が必要か…なら俺が手伝いたいから、でどうだ？」

アルフ「そんなの信じられるわけないだろ！」

ですよ…どうしたら…あっ！あれあげよう

ライト「だったらこれ渡しておくよ」

そっいつて青い石を渡す

アルフ「よし！信じよう！」

ライト「かるっ！」

まさか…ここまで軽いとは…

ライト「フェイトは？」

フェイト「私は…手伝ってくれるんだったら良いよ」

ライト「そっか、これからよろしく」

そう言つてニコツと笑つた

フェイト「あう…よ…よろしく／＼」

ライト「?? フェイト顔赤いぞ? 風邪か?」

そう言つてフェイトに近づこうとすると

フェイト「う…ううん! 大丈夫! 風邪なんかじゃないから!! / /
」

ライト「そうか? なら良いけど…体には気をつけるよ?」

フェイト「うん! わかつた!」

フェイトがなんかおかしくなつたけど…これって気にしたら負けなのかな?

アルフ「そういえば名前聞いてなかつたね」

ライト「そういえばそうだな」

忘れてたな

デステイニー「マスターは最近歳でしてね…」

ライト「なあ…ドライバーってある?」

アルフ「ちよつと待ちな…たしかここに…」

デステイニー「ちょ…マスター! 冗談…冗談ですつてば!!」

デステイニーが慌てるよ(笑)

だがデステイニーには…

ライト「落ちて着けデステイニー…お前にネジらしいものがあつたか?」

デステイニー「あつ…!!」

デバイスのクセに自分の事がわかつてないとはな…あれ? それじゃ

デステイニーはどうやって出来てんだろ?

まあ…いつか

ライト「んで…名前だつたな。俺はライト・レイフォールだ」

アルフ「アルフだよ」

フェイト「フェイト・テストロッサです… / / /」

フェイトはまだ元に戻ってなかったか…

ライト」と…とにかくこれからよろしくな！」

これから楽しみだな！…一部不安だけど…

第三話 協力

ドラえもんって昔は黄色だったんだね。この間知ったよ（後

作者「ハイ！後書きのコーナー！」

ライト「なんだよ…いきなり」

作者「何となくに決まってるだろ」

ライト「黙れ適当人間」

作者「ウフフ…流石の私もそこまで言われたら泣いちゃうよ」

ライト「（無視）今回もグダグダで跳躍し過ぎだな」

作者「無視か！まあいい…それにフェイトサイドだしね」

ライト「なあ…キャラ崩壊がだいぶ酷くないか？」

作者「まだ軽い方じゃね？」

ライト「それに途中からフェイトの顔が赤くなっておかしくなった気がするし…」

作者「（こいつ…鈍感か！？）た…たぶん気のせいだろ」

ライト「そうか？」

作者「気にしたら負け！！今回は…少し時間を飛ばして温泉になります」

ライト「なんか流された…温泉か…飛ばし過ぎてないか？」

作者「いや…記憶がうる覚えでさ…間になにがあったか覚えてなくて…あれ？ライトくん？なんでセットアップしてデステイニーを逆手に持つてるの…？」

ライト「レッツ肅清タイム」

作者「ちょ…それいずれ出そうとしてた技！！」

ライト「アイン・ソフ・アウル！！」

作者「ギヤアアアアアス！！」

ライト「ふう…作者は星になりました。それではまた次回」

第四話 湯の町の戦い

温泉って普通火山の近くにあるよね？

海鳴って火山

第四話です

時間がかかり過ぎました…

第四話 湯の町の戦い

温泉って普通火山の近くにあるよね？

海鳴って火山

ライトがフェイト達に協力し始めてから数日後：

どうも、ライトです。

今、作戦会議って言うか搜索場所の話し合いをしています。
ん？この数日間どこに居たって？

この部屋を拠点にジュエル・シードを探してみましたよ

何でこの部屋を拠点にしてるのかって？

決まってるじゃないですか…

フェイトに無理やりですよ

あの話の後出て行こうとしたらフェイトに「帰るの？」って聞かれて「公園か何処かで適当に野宿する」って言ったら「野宿！？ダメ！！ダメ絶対！！帰るとこ無いならここにいて」って言われました…
おとなしそうな人ほど怒ると怖いと言う意味がわかりそうな気がしましたよ…

長くなりましたね。後日談終わり！！

「温泉？」

俺はフェイトに聞き直した

「そう。あの近くはまだ探していないからね」

「温泉…」

「あつ…そう言えば記憶喪失だったね。温泉つてのは…」
アルフ（猫耳女って言ったら怒られました）が温泉について説明しようとしてきた

「たしか火山エネルギーで暖められたお湯の事だろ？」

「え？何で知ってんの？」

「何でだろな（笑）」

何故かそういうどうでも良いことは覚えてんだよね…

『“ご都合主義”ですね。わかります』

デステイニーの言葉はスルー

「それで？今から行くのか？」

「うん」

俺の質問にフエイトは普通に答えた。
この前の異常は何だったんだ？

「その前に皿を片づけないと…」

俺は三人分の朝食の皿を片付ける

「ライトって…主夫みたいだな…」

アルフうるさいぞ！

元々はフェイトがコンビニ弁当かう　ダーとかの軽いものしか食べてないが原因なんだよー！！

そんなこんなで時間を飛ばして海鳴温泉

「湯気がすごいね」

「ちよつとすごすぎじゃないかい？」

「何も見えん…」

上からフェイト、アルフ、俺で率直な感想を言った

「んで？」

「んで？…とは？」

アルフ…疑問を疑問で返されても…

「いや…どつやつて探すんだ？」

「ジュエル・シードは魔力の塊だからね。ジュエル・シードのちよつとした魔力を感知しながら探すの」

「へ〜」

フェイトさん説明ありがとうございます

「それじゃさっさと始めようか」

5分後…

「疲れた〜」

「まだ数分しかたっていないじゃないか」

「うるさいぞアルフ、疲れるモンは疲れるんだ」

「あはは…」

更に数十分後

「幾らか場所がしぼれてきたね」

「腰痛え…」

「爺臭いよ…」

俺が腰をパキパキ言わせながら背伸びをしていたらアルフがなんか言ってきた

「マスターはだいぶ歳で…」「デステイニー？」「すみませんでした！
！」
「なんかこのやり取りに馴れてきたな」

「あはは…んでフェイト？動くのは夜だよね」

「そつだよ…あの子も来るのかな…」

「そりゃ来るだろうよ。アイツらもジュエル・シード集めてんだからな」

「うん…でも…」

「戦いたくないのか？」

「できることなら…」

珍しくフェイトが弱音を吐いてるな。でも…

「残念だけどアイツらその宿に来てるよ」

「「えっ!?!?」「」

この様子からすると気づいてなかったのね

「いつ気づいたんだよ!…」

アルフがいきなり胸ぐらをつかんで前後に振り出してきた

「さっ…き…探し…てた…ら…くる…ま…からおり…てくる…のが
み…えた…ウプ…」

ヤバ…気持ちわる…

「アルフ！止めて！ライトの顔が青くなってるから！」

「へ？あ…」

アルフがいきなり手を離れた。死ぬかと思った…

「殺す気が…」

「ごめんごめん」

「まったく…」

「戦わなきゃいけないんだね…」

「大丈夫だろ。俺やアルフもいるから」

「そう…だよな？」

「何故疑問形？」

「あつごめん…」

あれ？慰めたつもりなのに逆に落ち込ませた…？

そんな事していたらアルフがなにか言い出した

「良いこと思いついた！！アタシがその子を見てきてやるよ…」

…なにを言い出すのかと思えば…

「アタシがその子の力を見極めてくる！」

「無理だろ」

「なんでさー！（泣）」

「人を見極める程の目が無いだろ」

「いや！アタシだってそれぐらいは……」

はあ……とか何とか言っておいて……

「本当の目的は温泉だろ」

「ギクッ……」

「凶星か……」

「ジュエル・シード探しはどうすんだ？」

「いや……ほら……温泉はその子を見たついでで……」

「いいよ」

「なっ……」

「本当！？フェイト、ありがとー！」

すぐさまアルフは宿の方へ飛んでいった

「いいのか？」

「うん……アルフはアレでも人を見る目はあるから」

「ジュエル・シード探しは？」

「私達だけで大丈夫だよ」

「アイツ…絶対温泉目当てだぞ？」

「ちよつとした休みつて事で…」

「日頃から全く休んでない人が言う事か？」

「あう…ごめんなさい」

おっと…話が長くなったな

「フェイト、さっさと再開するぞ」

「うん！」

「…！ライト…！あつたよ！」

「お！ほんとうか？」

アルフが白いのを見に行つて数十分後、ようやく見つけた

「うん、その池だ。」

「やっとか…」

「それじゃアルフに念話で…」

(あゝあゝ、フェイト…ライト…？聞いちゃう…？)

フェイトがアルフに念話で伝えようとすると思いにアルフから念話
きた

「(うん、聞こえるよ。どうしたの?)」

(白い子を見てきたよ)

「(どうだった?)」

(はっきり言ってフェイトの敵じゃないね)

「(そう)」

「(かなりはっきり言うな)」

(しょうがないじゃないか、本当なんだし)

「(お前の目が確かかな)」

(まだその話続いてたのね…そんな事よりジュエル・シードは?)

「(見つけたよ。予定通り夜に動こう)」

(さっすがアタシのご主人様)

「(俺も探してたんだが?)」

(ついでにライトも)

ついでか…俺はついでなのか…

「（ライトが落ち込んだじゃったよ…）」

（じょ…冗談だっけば、冗談…）

「（まったく…）」

（それじゃ…）

「（うん。夜に落ちあおう）」

（りょうかい）

アルフの念話が切れた

「アルフに連絡する手間が省けたな」

「そうだね。ライトは夜までどうする？」

「寝ます」

「そ…そうなんだ…」

「おう。おやすみ」

俺は人目につかなそうな木に登って眠った

数時間後

夜

「起きろ！」

「グハッ……」

寝てたのに鳩尾を殴られて意識が戻った

「ゲホッ……何するんだよ……アルフ」

「いくら起こしても起きないから力任せにやらせていただきました」
「」

人を起こすのに鳩尾って……

「お前……人の起こし方は他にもあるだろ……」

「いや〜ライトがなかなか起きないからさ」
「だからと言って鳩尾は……もういい、それよりフェイトは？」

「フェイトならジュエル・シードのところ……」
アルフが後ろの方に指をさした瞬間光の柱が建った

「アルフさん……あれは？」

「たぶん……ジュエル・シードの光だと……」

「」

「」

しばしの沈黙がおとずれた

「「急げえええ!!」」

ライトとアルフは慌てて光のもとへ向かった

「ヤバいよ!完全に遅刻だ!!」

「わかってる!!」

そして二人が現場に着くと同時にジュエル・シードの光は治まった

「あれ?二人とも遅かったね」

「わ…悪い…寝坊…した…」

「そ…そうなんだ…もう封印は終わったよ」

よかった…フェイトに怪我は無かったみたいで…

「あっ!!」

「ん?」

後ろから声がしたため振り返ると白いのがいた

「おやおや…よい子はお家で大人しくしてなって言わなかったかな?」

アルフが狼形態になった。

「あいつ、使い魔だ！」

フェレットが何か叫んでる

「なのは！ジュエル・シードを奪い取らないと！..」

「うん..」

「させるとでも思ってるのかい!？」

「させてやるさ!..」

アルフが白いのに飛びかかって行くとフェレットの足元から魔法陣が広がり自分とアルフを転移させてしまった

「おゝアルフが消えた」

「転移魔法..良い使い魔を持ってるね」

「ユーノくんは使い魔ってヤツじゃないよ！友達!..」

白いのは杖をこちらに向けてくる

「ッ...」

フェイトもそれを見て身構えるが..

「フェイト..先に帰ってる」

「え?どうして...」

「今回は俺が戦う」

「で…でも…」

いきなりでフェイトが戸惑っていた

「寝坊した分だよ。俺の事は心配いらなから」

「……………」

フェイトは少し考えて…

「わかった…じゃあ…」

フェイトは先程封印したジュエル・シードを渡してくれた

「わかった…増やしとくよ」

「うん！それじゃ…怪我しないで…」

そう言ってフェイトは暗闇に消えた

「さて…それじゃ白いの！お互いのジュエル・シードを1つずつ賭けて勝負しようぜ」

「なっ…！私白いのじゃないよ！なのはだよ！高町なのは…！」

「ひるたいな…叫ばなくても聞こえてるのだよ…」

「ひ…ヒドい…（泣）」

「うえ？半泣き！？」

「だああ！悪かった！悪かったから泣くな！！」

「ぐす…あなたの名前は…？」

「お…俺はライトだ。ライト・レイフォール」

「わかったよ。ライトくん！ジュエル・シードを賭けて勝負！！デ
イバインバスター！」

え？もう始まつてるの？これ？しかもいきなり砲撃！？

「うおおい！？」

「あっ…！」

俺は砲撃が当たる前に空に逃げた

「あぶねえ〜初っぱなにやられるかと思った…」

下を見るとなのははまだ地上にいた

「それじゃ…今度はこっちだ！デステイニー！モード・ファング！」

『ファングモード』

俺はデステイニーを少し小さめの二丁の銃剣にした

「増えた!?!」

「これでも食らえ!」

なのはの真上から二丁になったデステイニーの魔力弾を乱射した

「にゃあああ!」

なのはは足から羽を出して避けている…猫みたいな鳴き声とともに…

「逃げているだけか?なのは」

「そんな事ないけど…」

「その程度だったらフェイトには到底追いつけねえよ!」

「!?!」

ちよつとした挑発を試みたらすぐに目の色が変わった

「ディバインバスター!?!」

「おつと…」

先ほどのより強力そうな砲撃だったが軽く避ける

「良いじゃねえか!」

「はあ…はあ…」

「もう体力切れか？しょうがないな…」

「え!?!」

俺は高速でなのはの後ろに回り込んで首筋にデステイニーを近づけた

「俺の勝ち」

『put out』

「レイジングハート!?!」

俺が勝ちを宣言するとなのはのデバイスがジュエル・シードを一つ出した

「いい奴だな…んじゃジュエル・シードはもらって行くぞ」

「あ!ちよっ…」

なのはのデバイスからでたジュエル・シードを掴んで俺は空に飛び上がった。途中なんか言っただけ無視してフェイトのマンションに帰った

…ところでアルフは何処行ったんだろ

第四話 湯の町の戦い

温泉って普通火山の近くにあるよね？

海鳴って火山

作者「…………orz」

ライト「また土下座かよ…今度はどうした？」

作者「時間かけたクセに駄文しか出来なかった…」

ライト「知らなかったのか？最初から駄文だよ」

作者「グハツ…」

ライト「今回は戦闘入れたみたいだけど短かったな」

作者「限界を感じたんです…！」

ライト「いばるな…！」

作者「ぎゃあああ…！」

ライト「片づいたか…それでは…！」

第五話 蘇る記憶 ピカチュウって、何で尻尾の根元だけ茶色なんだろう(前)

第五話です

時間がかかり過ぎました…

第五話 蘇る記憶 ピカチュウって、何で尻尾の根元だけ茶色なんだろう

白いの…もといなのはと戦いました。軽く倒したらジュエル・シードが増えました。少し面倒だと思いました。

…作文!?

b y ライト

「ん…もう朝かよ…眠い…」

ライトは朝日で目が覚めた
ちなみにライトはフェイトのマンションにあるソファで寝ている

「デステイニー…今何時？」

『午前八時です』

「もう一眠り…」

「起きろ!…」

「グハツ…」

もう一度寝ようとしていたライトの腹に拳が入った

「その起こし方止める…腹が…保たない…」

「えゝ腹が鍛えられてんだから良いじゃん。」

「良くないわ!！」

『やれやれ…この光景にも慣れましたね』

「「お前が言うな!！」」

『サーセンw』

「おはよう〜」

フェイトが目を擦りながら入ってきた

「フェイト!！」

「フェイト、起きてたのか」

「二人が騒いでたからね」

「フェイト、二人じゃなくて二人と一機だ」

「ライト…そこは別に訂正しなくても良いんじゃない?」

「そうか?でもこの騒ぎにはデステイニーもいたわけだし…」

『サテ…ナンノコトヤラ』

「オイコラテメエ、へし折るぞ」

『フツ…マスター程度にへし折られる私ではありませんよ』

「へえ…そうか」

ライトは腕からデスティニーを外し潰して握りだした

「ライト…止めておいた方が…」

「まあ見てろよ。フェイト」

ライトが手に力を入れた

『ふっ…マスターもそのてい…あれ？何だか嫌な音が…ちよっ…
ンマー…ミシミシ言ってる！お願いしますから止めてくださいいい
！…！』

ライトは潰すのを止め腕に付けた

「俺にケンカ売るからだ」

『すみませんでしたマスター！一生ついていきます！…！』

「よし…！」

「（ねえアルフ…これ何？）」

「（アタシにもわからないよ…）」

「ッ…！」

フェイト達が念話で話しているとライトがいきなり後ろに振り返った

「ライト？」

「どろしたの？」

「あつ…いや…何でもない（何だったんだ？今の感覚）」

「「???」」

そんな事をしながら時間も過ぎ、昼頃
ビル屋上

「……………」

「ねえライト…見つかりそう？」

「ちよつと待ってる…」

ライトは搜索魔法でジュエル・シードの僅かな魔力を探っていた

「うゝん…それらしい魔力は感じられるけど、決定的って感じじゃないんだよな」

「そっか…」

「それにしてもよく広域に搜索魔法使つて魔力保つね」

「デステイニーの話だとSS+位あるらしいけど…」

そついうとフェイト達は引いていた

「な…なんで離れてんだよ…」

「アンタ…ホントに人間？」

「どういうことだ？」

「その歳でSS+って高すぎるよ…」

「フェイトでもSランク無いのに…」

「俺ってホントに異常なのね…」

『突然変異って事でw』

「何故お前は笑ってたよ」

『何となくですw』

「そうか…とりあえず笑うのを止める」

『サーセンw』

「でもいくらSS+あっても疲れるでしょ？」

「んゝまあそうだな…だから封印とかそこら辺は今日はパスで」

「りょゝかい」

「ライト…キツかったら休んで良いからね？」

フェイトは心配そうに言ってきた

「大丈夫 誰かと違って休む時に休んでるから」

「うえ!?!」

「確かにね」

「ア…アルフまで…私大丈夫なのに」

『その顔色で…ですか?』

「うう〜」

「後は俺がやっておくから見つかるまで帰って寝てる」

「だから私は大丈夫だって…」

「アルフ…レッツゴー」

「了解!」

アルフがフェイトを抱き上げた

「ちょ…アルフ!? 主人は私だよね!?!」

「だからアタシはそのご主人様の為に動いてるんだよ」

「つーわけでさっさと帰って寝る」

「降ろして〜!」

フェイトは叫びながらもアルフに連れて行かれた

「ふう…お姫さまにも困ったもんだな」

『全くです』

ライト達はそんな事を言いながらジュエル・シードの搜索を続けた

「なあ…デステイニー」

『なんででしょうか?』

「今日はなんか変じゃないか?」

『どづいことですか?』

「何というか…いつもと感覚が違うみたいな…」

『そうですか?私には感じられません』

「気のせいかな…」

『というより私はデバイスなのでそこら辺はわかりませんw』

「あゝそういえば」

『私はデバイスですよ?機械ですよ?機械に人の感覚が真似できる
と思ってるのですか?』

「うるさいな…お前がグダグダ喋るから忘れてたんだよ。少しはフ
ェイトのバルなんとかを見習えよ」

『バルディツシユですね。ではマスター、私が急に話さなくなった
らどうします?』

「……それはちょっと寂しいな」

『そつでしよう?今がちょうど良いんですよ』

「そんなもんか?」

『はい』

気がつくと太陽が傾きかけていた

「もう夕暮れか…」

『結局見つけられませんでしたね』

「ある程度の範囲がわかったんだから大丈夫だろ」

『それもそうですね。フェイトさん達に連絡しますか?』

「いいや、しなくていい。来たから」

ライトが日が沈みかけの空を見上げるとフェイトとアルフが向かっ
て来ていた

『本当ですね』

「ライト！」

「よう。ちゃんと休んできたか？」

「アタシが無理やり寝かせたから大丈夫だよ！」

アルフが親指を立ててきた

「私が寝るまでずっと監視してるんだよ……」

『「あ〜」』

「な…なんだい？」

『「別に〜」』

「そ…そんな事よりもジュエル・シードは？」

「そうだったな」気がつくと周りはずでに真っ暗になっていた

「この辺りって所まではわかったんだけどね」

「あ〜こんなに人がゴミゴミしてたら探すのも一苦労だね」

「しょうがないよ…少し乱暴だけど魔力弾を打ち込んで強制発動させよう」

「あ〜それはアタシがやる！」

「アルフ？でもこれ疲れるよ？」

「そうだぞ？大丈夫なのか？」

「長時間広範囲に搜索魔法使ってた人に言われたくない」

「うぐっ…」

「それにアタシを誰の使い魔だと思ってるんだい？」

「そうだったね」

「まあ…確かにな」

「それじゃ…いくよ！」

アルフは足元に魔法陣を出し拡散する光を打ち上げ同時に広範囲に結界魔法をつかった

すると強制的に発動されたジュエル・シードが現れた

「ふう…それじゃフェイト、後よろしく」

「わかった」

「なのはが来るかもしるないからな」

「なのはって？」

「あの白いのだよ。アイツも集めてんだから来るだろ」

「その時はフェイトが蹴散らすさー!」

「じゃあ行くね」

「あっ!あと」

「?」

「嫌な予感がするから気をつける」

「うん」

フェイトはそのままジュエル・シードのもとへ行った

「それじゃアタシもフェレットと遊びに行きますかな」

「そっか、んじゃ足止めよろしく。俺はここで見てるから」

「あいよー!」

アルフもビルから飛び降りた

それと同時に激しい光が出た

『ジュエル・シードが封印されました』

「そっか…」

『フェイトさん達以外の魔力反応…なのはさん達もいるようです』

「……………」

『マスター？』

「あ…！？いや大丈夫」

『そうですか？』

「ああ…（なんでだ…なんで嫌な感覚が増えているんだ？）」

「フェイト！話さなくていい！！」

「！？」

ライトが考え事をしているとアルフの声が響いた

「そんな優しい人達の周りでぬくぬく暮らしてきた奴に言わなくていい！！アタシ達の最優先事項はジュエル・シードの捕獲だよ！！」

アルフはフェイトに言い放った

「くっ…」

フェイトは顔に苦渋の色を見せ一時的になのはとの戦闘を止めてジュエル・シードのもとへ向かった

「あっ…」

それに反応したなのもジュエル・シードのもとに向かった

「俺達も行くぞ！デステイニー！！」

ライトもジュエル・シードのもとへ飛んだ

『マスター！一体どうしたんですか！？』

「この後なにかが起こる…！！」

『まさか…それがマスターの言ってた嫌な予感ですか？』

「そうとしか考えられない！」

ガキン…

「なっ…」

「えっ…」

同時に二人のデバイスがジュエル・シードにあたりデバイスにヒビが入った

「クソッ…」

その後ジュエル・シードから放たれた凄まじい衝撃波が辺りを襲った

「きゃあああ！」

「くっ…」

「なっ…ぐ…っう…」

なのはとフェイトはジュエル・シードの威力に耐えきれず吹き飛ばされライトは何故か頭をおさえだした

『マスター！どうしたんですか！？』

「頭が…割れ…る…なにか…おもい…だせ…」

その時ライトの頭の中では幾多の景色が凄い速さで流れていっていた

「（なんだよこれ…記憶…？俺は…俺は…）」

『マスター！！』

「！！！！」

ライトはデステイニーの叫び声で意識が覚醒した

『早くジュエル・シードを止めなくては！！』

「…ああ！わかってる！！」ライトは目つきを変え銃剣であるデステイニーを逆手に構えて一気にジュエル・シードとの距離を縮めた

「止まりやがれ！アイン・ソフ・アウル！！」

ジュエル・シードにライトの放った黒い光が当たると火柱が立ち上った

「ライト！！！！」

「フェイト！危ない！！」

「でもライトが！！」

そして火柱が消えるとライトがジュエル・シードを掴んで立っていた

「やっと…とまっ…」

ライトはドサツと地面に倒れた

「ライト！！」

フェイトはすぐにライトに駆け寄る

「ライト！ライト！！」

「フェイト、早く連れて帰ろっ」

「うっ…うん」

アルフはライトを担ぐとなのは達を睨み夜空に飛んでいきフェイトはそれについて行った

第五話 蘇る記憶 ピカチュウって、何で尻尾の根元だけ茶色なんだろう(後

ライト「……………(無言で鞭を装備)」

作者「……………(無言で正座)」

ライト「何が言いたいのかわかるよな？」

作者「ハイ……」

ライト「それじゃ……何で1ヶ月間ほぼ放置状態だったのか訳を聞こうか」

作者「理由は二つです」「言い訳なんて聞きたくないわ!!」「イタアアア!?!」

作者「何で!?!何で言い訳聞かなくて言ったのにいきなり鞭で打つの!?!」

ライト「俺は訳を聞くと聞いたが言い訳を聞くとは言ってない!!」

作者「理不尽だ……(泣)」

ライト「しょうがない……手短かに言えよ」

作者「わかりましたよ……一つ目は入院してました」

ライト「何でだよ」

作者「熱中症ですw」

ライト「はあ!?!」

作者「いや…夏休みに実家に帰って家の事手伝ってたら急に目の前が真っ暗になっちゃってw」

ライト「笑い事じゃないし…それ以前によく生きて帰ってこれたな」

作者「悪運だけは誰にも負けない!!」

ライト「そこは威張るところじゃない」

作者「んでもう一つはですね…小説のストックが消えちゃった」

ライト「消えちゃった…じゃねえ!!キシヨイわ!!」

作者「ひ…ひどい…ストックが無いから1から作り直したのに…」

ライト「とりあえずお前の根性を叩き直す」

作者「へ!?!ちょ…小説書かないと何時になるかわからないからパ…」

ライト「お前に拒否権は無い。小説の方は少しくらい待ってもらえ」

作者「いやいやいやいや!それは無いでしょ!」

ライト「ではこれから少し遅くなりますがちゃんと更新させますんで。それでは!!!」

作者「ちよつと！勝手に終わらせないで！つて襟を引っ張るな！お願ひしますから！！！ギヤアアアアアアア！！！！」

第六話 管理局

映画の時のジャイアンの優しさは異常(前書き)

覚えてる人いるかな……………?
久々更新6話です

第六話 管理局

映画の時のジャイアンの優しさは異常

「あれ…？ここは…」

ライトは燃えている研究所のような建物の前にたっていた

「なんだよ…これ…」

足下にはまだ幼い子供の焼死体がたくさん転がっている

「誰がこんな…！？」

前を見ると小さな子供を抱きかかえている男がいた

「まさか…アイツが！」

すると男は子供を抱きかかえたまま何処かへ行こうとした

「ちょっと待てよ！」

ライトは走ってその男を追いかけたが、男はそのまま転移魔法でどこかへ消えてしまった

「はあ…はあ…クソッ…あの男…どこに…あれ…？」

ライトが立ち止まると急に力が入らなくなり、地面に倒れてしまった

「（力が…はいらねえ…）」

目の前が徐々に暗くなっていく

(彼らに気をつけて……)

「(?!…だれ…だ?)」

突然誰かの声が聞こえたが、完全に意識を失ってしまった

「う…」

気がつくと、そこはフェイトのマンションだった

「あれ…夢?」

『おはようございます。マスター』

「デステイニー…」

『気分はどうですか?』

「…ああ、まあまあかな」

ライトはデステイニーの質問を素っ気なく返した

「(夢…にしてはリアルだったな…あの男…それに最後の声は…)」

「おっ!起きたのかい?」

「んあ?」

考えているとアルフが入ってきた

「一時はどうなるかと思ったよ。全身大火傷で」

「火傷？」

体中を見るとメチャクチャに包帯が巻かれていた

「…こりゃひでえな（汗）」

「あはは…それフェイトが巻いたんだよ」

「フェイトが？」

「うん。帰ってきてからアタシが包帯を巻こうとしたら、フェイトが、私がするって言ってさ」

「それで顔以外ミイラ男状態な訳だな…」

「うん…」

「それで、フェイトは？」

「そこにいるよ」

アルフが指さした方向を見ると、毛布にくるまって寝ているフェイトがいた

「一晩中アンタの看病するって言ってた」

『いつの間にか眠ってましたけどね』

「そっか…」

何故か急にしんみりした空気になってきた

「…この寝顔を見てたら思うんだよ。何故ジュエル・シードなんて物を集めさせてるんだろうって…」

「あゝ俺も、こんな女の子のどこに砲撃を撃つ魔力があるんだろうって思うよ」

その瞬間アルフが勢いよく振り向いた

「な…なんだよ、そのジト目は」

「アンタに人のことが言えるのかい？」

「どつという意味だ？」

「半径何キロにも長時間搜索魔法使うなんて普通じゃありえないんだよ！？」

「え！？アルフだって頑張れば出来るんじゃないの？」

「出来るわけないだろ！？あんな事やったら軽く死んじゃまうよ！！」

「これって致死量超えてんの！？」

「アンタの魔力量がおかしいんだろ！？」

『あのお二方?』

「なに!?!」

『静かにしないとフエイトさん起きてしまいますよ』

「……」

「……そうだね」

しばらく騒いでようやく気がついた二人

「……ん」

『「」「」あっ』

だが遅かった

「あれ……? ライト!?!」

「よ……よっ」

「ライトオオオ!?!」

「!?!?!?!」

フエイトが急に抱きついてきた

「よかった……よかったよお」

「あ…ああ」

「死んじゃったかと思ったんだからね…？」

「じめん…」

「あのさ…フェイト…ライト」

『いやあくお熱いですねえw』

「うえ！？あ…／／／」

フェイトは自分の行動を思い出し、赤面した

「なあアルフ…お熱いってどついう意味だ？」

「知らないなら知らないままの純粋なアンタでいてくれ…お願いだから」

「????？」

「ね…ねえライト／／／」

少し立ち直ったフェイトが話しかけてきた

「ん？どうした？」

「普通に体動かしてるけど、火傷とか大丈夫なの？」

『たしかに…さつき普通にアルフさんと言い争いしてましたしね』

「余計な事は言わなくていいよ」

すぐにアルフはDestinyにツツコミをいれた

「そついえば痛みとか無いんだよな…」

ライトは数回腕を回した後、包帯に手をかけた

「めくるぞ…良いな?」

「う…うん」

『ドキドキ…』

「どつでもいい事はしなくていいから早くしてよ」

「ノリ悪いな、アルフは」

ライトは少し文句を言いながら包帯をめくった。
するとそこには…

「傷が…無い?」

包帯の内側は何事も無かったかのように傷痕一つ無い腕だった

「じゃあ…」

ライトは上半身の包帯もとった。

しかしそこも傷痕一つ無かった

「なんで…?」

「アルフ、俺に治癒魔法かけたか？」

「かけるにはかけたけど…完治するほどはかけてないよ?」

『謎ですね〜w』

「テメエは何にも考えてないだろ」

『……………嫌ですね〜そんなわけ無いじゃないですか〜』

「今の間は何だ!今の間は!」

『それよりもフェイトさん達は何か用事があるのではないですか?』

「話を急に変えるな!」

「そうだった!アルフ、すぐに行こう!」

「わかったよ…」

「どこかに行くのか?」

「うん、今日は母さんに途中報告に行く日なんだよ」

「へえ〜フェイトの母さんにね…どんな人なんだ?」

「…とっても優しい人だよ」

「ッ！」

フェイトがそう言っているとアルフの顔が険しくなった

「どうした？アルフ」

「んえ！？な…なんでもないよ！」

「そうか…？」

「ねえ？ライトも来る？」

「俺は…今回は良いや。傷がいきなり治ったから何が起こるかわからないし」

「そうだね。元怪我人はおとなしくしときな」

「なんかバカにされた感じ…」

それから少し経って、マンション屋上

「お土産も持った…大丈夫だね」

「お土産？」

「うん、甘いもの食べるかなって」

フェイトの手には紙袋が下がっていた

「あの女が甘いものなんかで喜ぶかねえ？」

「アルフ、こういうのは多分気持ちなんだよ」

「そうだぞアルフ。きっと喜ぶさ」

「そんなもんかい？」

「それじゃ行ってくるね」

「ああ気をつけてな」

「転移したら目の前が時の庭園だから道のりに気をつける要素は無いんだけどね」

「いや…でも、もしかしたら座標を少し間違えて…」

「そんな…まさか!？」

ライトがアルフに不安を煽りだした

「もう!そんな失敗はしないよ!！」

「ハハツ!それもそうだな」

転移魔法が発動し始めた

『それでは行ってらっしゃいませ』

「うん。じゃ後でね」

そしてフェイトたちは時の庭園にいった

「行ったか…」

『そうですね…って、なんかこれで最終回みたいな雰囲気になってますけど!?!?』

「なに一人で慌ててんだよ」

『いや、だって…』

「黙れ」

ゴスツとデステイニーを殴った

『いたっ!』

「そういえば、何でコイツは痛みを感じるんだろっ…」

今更の疑問である

戻って室内

「怪我人は怪我人らしく寝てるかな」

『マスター……』

デステイニーがいつもと違う雰囲気話しかけてきた

「どうした？」

『いつまでそのままにいるつもりですか？』

「なに？」

『昨夜のマスターの苦しみ方は異常すぎました。これは何かあったのしょう？』

「ああ、あれか…」

ライトはデステイニーの言っている事を理解し、一息ついて話しました

「昨日の事で思い出したんだよ。無くしてた記憶を」

『記憶を！？何故ですか？』

「さあな…でもわかってるのは昨日の衝撃波と、俺がこの世界に飛ばされてきたものが同じだったんだ」

『…なるほど。それではマスター、昨夜使った技はなんですか？あれほど豪快な技をマスターが編み出すのは不可能ですよ』

「あの技は俺を育ててくれた爺ちゃんが教えてくれたんだ。」

『ほ…それほどスゴい人だったのですね』

「そのあとすぐに死んじゃったけどな」

『……………』

「んで、俺は爺ちゃんの遺産でなんとか生きてきたわけだ」

『一人で…ですか？身寄りには？』

「俺に身寄りなんて無かったよ。その爺ちゃんだって血が繋がって無かったしな」

『では、どうやってそのご老人と出会ったのですか？』

「知らねえよ。物心ついたころには最初から爺ちゃんしかいなかったからな。でも…」

『でも？』

「そのぐらいかな？若い男の人が現れてさ…」

『まさか…その人が何か…』

「俺に剣とか教えてくれた」

『はあ！？なんでいきなり！？』

「さあ？なんでも爺ちゃんに昔世話になったことがあるらしくて、死んでるって知らずに訪ねてきたんだって」

『それとマスターに剣を教えた関係は？』

「しらね」

『ああそうですか…って！アンタ何も知らずに剣習ってたんですか！？バカでしょ！？てかバカですよね！？バカと認める！！』

「うるせえ！自分のマスターに向かってバカ3連呼するな！言つて虚しくねえのか！？」

『そつえばそうですね』

「ホントにテメエのクールダウンの早さには驚かされるな」

『それが私の取り柄なのでw』

「一回プレスしたほうがいいかな…」

『そんな事より話の続きはどうなんですか？』

「自分から話逸らしておいて…」（怒）

『早く 早く』

「……………」

コイツ本当にデバイスなのかと思いだしたライトだった

「…めんどくさいから止めた」

『え〜…』

「ガキかお前は。そこまで人の過去が知りたいのか？」

『人の過去、失敗談、恥ずかしネタ大好き』

「……………」

コイツには二度と自分の話はしないとライトは誓った

「んで？今日もフェイトが帰ってきたら行くのか？」

『行くのではないですか？バルディッシュの修復も夕方には終わるみたいですし』

「たまには休み入れればいいのに…」

『ですな〜』

「さて…フェイトたちが帰ってくるまでどっするかな…」

『さっきの話の続き！』

「却下」

『え〜』

そんなこんなで時間がながれていった

『早く聞かせてくださいよ。てか聞かせる』

「なんか命令口調になってねえか？つーか話さねーし」

『ケチー』

すると奥からガチャと音がした

「帰ってきたみたいだな。んじゃその話はまたいつか」

『ぶ〜』

外から元気の無いフェイトとアルフが入ってきた

「おか…えり？」

「ただいま…。ライト…どうかした？」

「いや…なんか元気ないなって」

「そんな事無いよ？私は…いつもどおり」

「なら良いんだけど…」

「バルディッシュ…大丈夫？」

『修復完了しました』

「そう…がんばったね」

「それじゃ…行くか？」

「うん…」

「……………」

「アルフ？」

「ん？あ…ああ行くっか」

「????？」

ビル屋上

「いるな…」

「うん…もうすぐ発動しそっなのが…」

「……………」

その瞬間一筋の光が建った

「来た！公園の方！！」

「行くっ！」

三人が公園に転移するとそこには木の化け物と白いバリアジャケット

トのなののがいた

「フォトンランサー」

「ギガアアア！」

フェイトが魔力弾を放つと木の化け物はバリアを展開し攻撃を防いだ

「わお生意気にバリア張ってるね」

「へ〜前よりか強いんだな」

「それに…あの子もいる」

ライトとアルフは木の化け物に注目していたがフェイトはなののはを見ていた。するとそれを感じたのか、なののはが振り向いた

「フェイトちゃん！ライトくん！あれ倒すの手伝って！！」

「どつするのさ？フェイト」

「うん…ライトはどつする？」

「うええ！？俺？」

どつやら自分に聞かれるなんて思っていなかったようだ

「そうだな…良いんじゃないか？手を組んでも」

「ええ！？でも…」

「アレを倒すまでだから」

「…うん…わかった」

「よし！じゃあなのは！俺がバリアぶち抜くからフェイトと封印してくれ！！」

「はあ！？ちよつと待てよ！！」

ライトの発言にアルフが噛みついてきた

「今の見ただろ！並みの攻撃じゃ防がれちまうんだよ！それなのに…」

「俺が並みのヤツに見えるか？」

「え…？」

「やれるな？デステイニー」

『当然です』

ライトは地上に降りデステイニーを木にむけ、魔力を溜めだした

「（魔力を一点に集中するように…）いくぞ！Xバスターー！！」

デステイニーから放たれた砲撃は一直線に木のバリアに直撃し、バリアを完全に破壊した

「ガアアアア！！」

「やつ…あれ？」

しかしライトの砲撃はバリアを破壊した後も消えず、木を貫通し、ジュエル・シードを残して消滅した

「……」

『マスター……』

「魔力入れすぎた」

「ライト君…軽すぎるよ……」

「まあ良いじゃん。ジュエル・シード出てきたんだから」

「あっそっか！いくよ！フェイトちゃん！！」

「……」

なのはに呼ばれフェイトもバルディッシュを構える

「ジュエル・シード！シリアル7！！」

「封印！！」

周りが一瞬光に包まれた。光が収まると封印されたジュエル・シードが浮いていた

「…ジュエル・シードに衝撃を与えたら暴走するみたいだ」

「うん…タベみたいな事になったら、私のレイジングハートも、フ
イトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」

フイトの言葉になのはは、そう返してきた

「でも…譲れないから」

「私は…フイトちゃんと話がしたいだけなのに…」

二人はデバイスを通常の状態に戻した

「私が勝つたら…私が甘ったれた子じゃないってわかってもらえた
ら…お話、聞いてくれるよね」

「……」

なのはの言葉にフイトは何も返さなかった

「今回は何も言わないんだな。アルフ」

「そりゃ…フイトに勝てたらね…」

「ふん」

なのはとフイトは空中で間合いを詰め、互いのデバイスを振り下
ろした。

「ストップだ!!」

しかし、どこからともなく現れた黒衣の子供に止められた

「管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「管理局だって!？」

「なんだそれ？美味しいのか？」

「アンタは…！後で話すから今は撤退するよ!！」

「う!?!?…お…おっ」

アルフは空中から地上に降ろされたフェイトに当たたらぬように発射する。しかしそれはクロノのバリアによって軽く防がれた

「フェイト！撤退するよ!！」

「ッ…!」

フェイトが空中に飛び上がるとアルフは溜めていた魔力弾を地上に向けて撃ち、爆風を起こした

「（もう少し…）あっ…」

「フェイト!？」

ジュエル・シードを確保しようとフェイトが手を伸ばすと爆風の中から魔力弾が数発出現し、フェイトに当たった

「大丈夫かい？フェイト」

「う…うう…」

アルフは自分の身を使ってフェイトの落下を止めた

「逃がさない」

「させるか…！」

「な…！？」

クロノが二発目の魔力弾を撃とうとしたがライトがそれを阻止した

「フェイトには攻撃させない…！」

「クソツ…（コイツ…なんて力だ…はじき返せない）」

「ライト…！逃げるよ…！」

「わかった…！」

「ま…待て…！」

クロノは止めようとしたが遅く、転移していた

フェイトのマンション

「マズいよ！時空管理局まで出てきたんじゃいつまでここがバレずに済むか…三人で何処かに逃げようよ」

「なあ…管理局ってなんだ？」

「それは出来ないよ。アルフ。母さんのためだもん」

「でも…」

「おお〜い…管理局って…」

「あのクソババア！意味のわからない事を言っ…」

「アルフ…母さんの悪口を言っちゃダメ」

「言いたくもなるよ！フェイトをこんな目にあわせて…」

「管理…もういいや…」

ライトはその場から少し離れた隅に腰を下ろした

それから少し経って…

「それで…これからどうやって探すんだい？」

「うん…ライトなら何か思いつくかも…」

「そうだね。ライ…あれ？いない…」

「本当だ…」

ようやくライトがない事に気づき、二人は周りを見渡した

「ねえ…アルフ…あれ」

「ん？ゲツ…！」

フェイトが指をさした方向を見ると、部屋の隅で藻を生やしてブツブツ言ってるライトが居た

「ライト ……戻ってこい…！」

「あはは…！」

それからライトが元に戻るまで数時間かかった……

第六話 管理局

映画の時のジャイアンの優しさは異常（後書き）

作者「……」（縄で縛られて逆さ吊りにされてる）

ライト「……」（無言で鞭を伸ばしている）

作者「…ライトさん、始まってますよ？」

ライト「ん？そうか…じゃあ今から作者の公開処刑を始めます！！」

作者「マテマテマテ！！何で！？何で開始直後に処刑！？しかも公開！？」

ライト「当然の報いだ！黒衣、罪状を述べよ」

黒衣「ハイ……」

作者「恐い！恐すぎるよ！黒衣！！全身黒衣って、どこの異端審問会！？しかも声が異常に低い！！」

ライト「ちなみにはフェイトだ」

作者「フェイトさんんんん！？ってバラしたら黒衣の意味無いし！
！それ以前に声低すぎる！！」

ライト「変成器使ってるからな」

作者「いや！水樹さんヴォイスが…！！（泣）」

フエイト「ねえライト…言っても良いの？（変成器OFF）」

ライト「いいよ。言ってる」

作者「今顔だしたよね！？よね！？」

黒衣「罪状…この作品の更新をおよそ3ヶ月怠った（変成器ON）」

作者「えつと…それは…」

ライト「万死に値する」

作者「ちよつと待って！…弁解の余地は！？」

ラ、黒「…ない」

作者「どしてええ！？」

ライト「よつて作者を…木村さんのハンマー投げの刑に処する」

作者「は？木村さん？誰それ？」

ライト「木村さんは木村さんだ」

作者「いやだから、きむ…なんか足音的なズシンの音が聞こえてきたけど…」

ライト「木村さん後よろしく」（黒衣と共に部屋から退室）

作者「……デカアアアア！？軽く3メートル超えてるよね…ち

よ…吊り下がってる紐持たないで…ああああ！回さないでえええ目
が目がああああ！…！？」

ライト「これで悪は滅びた…（キリッ）」

第七話 離別

ジャムおじさんとバタコさんは妖精

ライトside

「暑い…」

俺達は山の中を歩いていた…

「何で…」

夏の前だけあってかなり蒸し暑い中を…

「何でこんな所歩いてんだよおおお！！」

それは数時間前にまでさかのぼる…

「バレないように探すんだったら、ジャミングっぽいのをするしかないんじゃないか？」

「ジャミング？」

俺が管理局にバレないようにする案をだすとフェイトが聞き返してきた

「管理局って魔力センサーがあるんだろ？だったらこの部屋みたいにジャミングをするしかない」

「でもさ、そのジャミングは誰が出すんだい？アタシはそんなで即席でしたことないし…」

「私も…」

「俺に決まってるんだろ？」

二人の視線が俺に集まる

「出来るの？」

フェイトが心配そうに聞いてきた

「それは…」

『マスターの魔力を粒子化させて周囲に散布させれば可能です』

助かった…よくわからない説明をデステイニーが代わりにしてくれるようだ

「でもさ、管理局は魔力を感知するんだよ？その魔力を辺りに張り巡らせたら逆に見つかりやすいんじゃない…」

『マスターの魔力は特殊でして、散布した魔力は通信妨害を起こしますから大丈夫です』

意外と俺の魔力って高性能なんだな

「通信妨害って私たちにも影響がでるんじゃない…」

確かに…念話も一応通信と同じだ。それだと俺の魔力でフェイト達の念話を妨害してしまうはずだ…

『それは私が調節しますので平気です（キラッ）』

不安だ…スツゴく不安になった…（キラッ）さえ無ければ良かったのに…

「はあ…」

『ムツ…マスター何ですか、その溜め息は。そんなに私の（キラッ）が気に入らなかつたのですか？』

「氣にいる奴がいたらみてみたいモンだな」

『またまた…実は結構氣に入ってるんじゃないですか？私ってスツゴい人気者』

本気でウザい…腕が震えてきた

「ライト…とりあえず落ち着いて…」

「そ…そうだね…今は落ち着いて…」

フェイトとアルフが言ってきたけど…

「今すぐ破壊したい（怒）」

「だからダメ　！！！」

そんなこんなで今…

「あちい…」

「そんな事言わないでよ。こっちだって我慢してんだからな…」

「誰だよ！こんな場所に行くって言い出したのは！」

「それはアンタだろ！！」

「むう…ん？」

「……」

そんな中、フェイトは表情一つ変えず無表情だった

「フェイト、どうした？」

「……」

「おいフェイト…」

「……」

返事がない…ただのしっく「いやいやいや…勝手に殺すな」むう…

「起きろ〜フェイト〜」

「……………」

アルフがフェイトの目の前で手をチラつかせてみたが効果が無かった

「おい…これって本気と書いてマジでヤバいんじゃない？」

「しかたないね…フェイト…ボソボソ…ふにやあああああああ
?!?!」よし！起きた」

アルフがフェイトの耳元で呟くと奇声を発しながら復活した…何言
つたんだろ…

「アルフ…今何を言ったんだ？」

「……………乙女の秘密」

何だろ…悪寒がする…風邪かな…

「霧が出てきたね」

そんな中、復活したフェイトが周りに気がついた

『それはマスターの魔力ですね』

「……………へ？もうこんなに広がってたの？」

『既に半径3キロ辺りは…』

「そんなに!?!？」

「てか俺、こんなに魔力あつたんだ」

いや俺の魔力ってここまで異常だったんだ（笑）

「それにしてもねえな〜ジュエル・シード…」

「…うん」

「まあ簡単に見つかったんじゃないか…ん？」

アルフがなにかに気づいたらしい

「どうした？アルフ」

「いや…何か羽ばたく音と鳴き声が聞こえたよつな…」

「ただの鳥じゃないか？」

「いや…鳥にしては荒すぎ…」

「クエエエエエエエエ！…」

「」「！…？」「」

その瞬間何かの鳴き声が響き渡った

「す……凄い鳴き声だね…」

「地響きまでするとはな…」

『震度は1から2の間ほどですね』

「「「そこは聞いてない」「」

『（・・・）シヨボーン』

「そんな事やってないで！来るよー！」

空を見上げると普通のカラスの数十倍とも言えそうなほど巨大な鳥らしきものがいた

「デカイ…ね」

「旨そうだな」

「「は？」」

こんなにデカイの初めてだな…

「ラ…ライト？なに言ってるの！？」

フェイトが驚きながら話してきた

「なにつて…焼いたら旨そうだなって…」

「絶対に観点違うよ！？それ！」

「そうだよ！アタシも最初はそう思ったけど、あれは絶対に唐揚げが旨いよー！」

「アルフまで！？」

「なるほど…それもアリだな…それでいい」

鳥はやっぱり唐揚げだな

「デステイニー、まずは叩き落とすぞ」

『了解です』

俺は剣に雷の力を纏わせて振り下ろした

「雷斬衝!!」

「キエエエエエ!!」

振り下ろした剣の雷に当たり、鳥っぱいのが黒焦げになって落ちてきた

「よし!食べる!!」

「ちよつと!コイツは唐揚げじゃないのかい!?!これじゃ、ただ焼けただけじゃないか!!」

やべえ!忘れてた!!

「ここまで焼けたら揚げだつて意味ねえよな…」

「もう少し力抑えてよ」

『それよりもマスター、この鳥からジュエル・シードの反応があり

ます』

「なに!?!」

ジュエル・シード反応!?!それじゃあ…このデカさは…

『ジュエル・シードの影響ですね』

そんなあ…

「フェイト…封印頼んだ…なんかやる気失せた…」

「う…うん(食べれなかった事そんなにショックだったんだ…)」

クソっ…食いたかったなあ…巨大鳥…

「食べられないように早く逃げてね」

ふとフェイトを見るとジュエル・シードから解放されて復活したカラスを飛ばしていた

「に〜く〜…」

「カ…カラスは食べちゃいけないよ?」

「肉は焼くか揚げれば基本食える」

「アタシは生でもいける」

『狼や犬には鳥の骨は内部で刺さるから与えてはいけません』

『よ』

「骨を食わなかったら問題なし！」

「鶏肉の話はもう良いから早く戻ろつよ……」

フエイトside

「んで、あと探してないのは海周辺だな」

ライトが地図を開いて海を指差した。唐揚げの骨をくわえながら……

「海は広いから後回しにしてたんだよ」

アルフも生肉を食べながら答える。二人ともそんなに鶏肉食べたか
つたんだね……

「んでライト、作戦は？」

「魔力流して封印する」

結局、作戦同じなんだね。そして……

「魔力を流すのもライトなんでしょ？」

「当たり前」

ライトは骨付きの唐揚げを食べながら普通に答えた

「ねえ……何で私にその仕事をさせてくれないの？」

私はずっと思っていた事を言った。

「……………」

「ねえ、どうして？そんなに私って頼りないの？」

「…そうじゃないよ」

「それじゃ…どうして？」

「ただ…お前にツライ思いをして欲しくないから」

「…え？」

「お前にはいつも笑っていてほしいから」

「……………」

なんでそんな事を笑顔でいえるのかな／＼

「デステイニー、私たちがいるの忘れてるよ」

『ですね、鈍感人間のクセに』

「だから鈍感人間って何なんだよ！！」

…ライトはツラく無いのかな…

いつも笑っていて…

私たちを明るくしてくれる

記憶が無いのに、自分の魔力を酷使してジュエル・シードを探してくれて、さらには重傷まで負って…
でも私はライトに何かしてあげてたのかな…？私は…ライトに甘えてるだけじゃないのかな？何か出来ないかな…ジュエル・シードも残り少し…全てが終わる前に何かを…

「どした？フエイト」

「ふえ？な…なんでもないよ!？」

「そっか!」

本当に…素直に笑ってるね…

「…スイカの皮も揚げたら食えるかな？」

…でもちよっと変わってる(汗)

海上

「よっしゃ！アルフ、胃もたれ起こしてないよな!！」

「アタシが鶏肉程度で、もたれるわけないだろ!」

海の中にはライトとアルフがいる。
ちなみにフエイトは封印係で離れている

「そうだったな。ならさっさと終わらせるか」

「この間みたいに魔力を出さないのかい？」

「ん〜出したいたんだk」今回、魔力をどの程度消費するのかわかりませんから、無駄な使用は避ける事にしました』…だそうだ」

またデステイニーが横から入ってきた

「でもそれだと管理局が乱入してくるんじゃない…」

「アイツらは今回後に出てくるだろうな。俺たちが消耗した所を狙って」

「そっか…」

「なに暗くなってるんだよ！さっさと終わらせて、ジュエル・シードを渡すんだろ？」

ライトがアルフを励ます

「…うん！そうだったね！（ジュエル・シードを渡してあのクソババアに少しでもフェイトを褒めさせるんだ！！）」

「そんじゃ…始めるか。アルフはそっちを頼む」

「あいよー！」

「…さっそく、上級術いきますか！デステイニー、魔力操作任せた」

『了解です』

ライトは剣を上に向け、目を瞑り構える

「…悠久の時を巡る優しき風よ……我が前に集いて烈刃と成せ!!」
ライトは目を開き剣を振り下ろした

「サイクロン!!」

その瞬間、ライトの目の前に巨大な竜巻が豪風と共に吹き荒れた

『ジュエル・シードがわずかに反応しました』

「まだまだこれからだ!行くぞ!!」

数時間後

辺りはジュエル・シードの影響で竜巻が起こり荒れていた

「流石に…はあ…複数相手は…調子…乗りすぎたか……?」

『マズいですね…このままだとフェイトさんやアルフの魔力が保ちません』

「私は…まだいけるよ…」

デステイニーの判断にフェイトが答えるが、その声は途切れ途切れだった

「そんな声で信じられると…思ってたのか?」

「ライトだって…だいぶキツそうだよ…」

「俺は…体力が無くなってきた…だけだ」

「私だって…」

「ハア…アンタ達…夫婦喧嘩…してる場合じゃないだろ？」

二人を見かねたアルフが止めた

「困まれてるよ…」

ライト達の周りにはジュエル・シードで発生した竜巻が集まっていた

「いつの間に…」

「俺が…上級術で一気に…」

『ダメです！今の消耗しきった体では、上級術…いや、中級術ですら保ちません』

「でもやるしか…>ブオン！<…！？」

ライトがデステイニーの反対を押し切って詠唱しようとする、空から桃色の砲撃が竜巻の一部を消し去った

「ライトくん！フェイトちゃん…！」

「え…」

「なのは…?」

「良かった〜無事で」

なのはがゆっくりとライト達のもとへ降りていく

「どうして…?」

「管理局の船でフェイトちゃん達の映像見て来ちゃった」

「やっぱり管理局もいるのか…」

「うん…でもクロノくん達は消耗しきってからだって…」

「あのクソガキ…いつかデコピンでぶっ飛ばす…」

ライトがひとりで決心しているとき、横に金髪の同い年位の男が降りてきた

「ライト!今は封印が先だよ!」

「…だれ?」

ライトとフェイトが同時に聞いた

「へ?」

「いや…だから誰?」

「ゆ…ユーノくん！ライトくん達にはこの姿は初めてだよ！…」

「ユーノ…？」

「あ！そっか！僕はなのはの横にいたフェレットだよ」

「フェレット…？フェイト、そんなの居たっけ？」

「…さあ？」

「と言うわけでお前はだ」「居ただろうが！」「ゲフッ」

ゴスツと勢い良くアルフに殴られた。ライトだけ

「痛って〜！なんで俺だけ！？」

「気分！！」

「酷い！！」

「あのさ…」

二人が言い争いを始めたとき、ユーノ？が話し出した

「とりあえず封印しようよ。周りの状況が良くないからさ」

「フェイトちゃん！」

「え？」

「二人で封印しょ？」

「……」

「おい、俺は？」

「あ！ごめん。ライトくん忘れてた」

「…俺って影薄いのかな…？」

『人生そんなことがありますよ』

落ち込んでいるライトをデステイニーが慰める。なんとも言えない光景だ

「良いよ。ライトは休んでて」

「は！？いやだから俺が…」

「良いの！！最後まで私にやらせて」

「…わかったよ」

ライトは二人から少し距離を離れた

「アルフ！僕達はサポートを…！」

「アタシに指図するな！フェレットもどき…！」

ユーノとアルフがバインドで竜巻の動きを止める

「行くよ！フェイトちゃん！」

『shooting mode』

なのは自身のデバイスを変形させる

『shooting form setup』

バルディッシュが勝手に封印をする時の状態になる

「バルディッシュ……」

『行きましよう』

「……うん！」

フェイトもバルディッシュを構える

「サンダー……」

「デイバイーン……」

「レイジィィー！」

「バスターアー……！！！」

二人の砲撃は海に直撃し

、光が消えたときには6個のジュエル・シードが宙に浮いていた

「ああ〜終わった終わった」

『マスターは最後何もしてませんけどね』

「うるせえ!」

「ライト!」

そんな中、先ほどのユーノ(?)が話しかけてきた

「あ…えくと…ユーノ…だっけ?」

「どうしてこんなムチャをしたんだよ!」

「……」

「ライト?」

「ゴメン…ホントに思い出せない」

「え?まだ言ってたの?僕だよ。僕」

『残念ですが。あなたと遭遇した回数は零です』

「新手のオレオレ詐欺か?」

「僕だよ!ユーノだよ!!何回も言ってるだろ!」

『「ゴメン。わかんない」』

「僕って…いつたい…」

ユーノがいじけだすと同時に雲行きが怪しくなってきた

コロコロ…

「…雷？」

『魔力反応があります。ただの雷じゃなさそうですね』

「この魔力…フェイトじゃないよ！」

「アルフ？ならこの魔力は…」

「これは…プレシアの魔法だ！」

その時雷が落ち、フェイトに直撃した

「きゃああああー!!」

「フェイト!!」

ライトは自身の出せるスピードの最大を出し、海へ落下するフェイトを受け止めた

「フェイト!フェイト!!」

「ライト!逃げるよー!!」

「でも、フェイトが…!!」

「いいから早くー!!」

「クソッ!」そしてライトはフェイトを抱きかかえたままアルフが作った転移魔法の中に飛び込んだ

「え?あ!ちよ!?!?...行っちゃった...」

「だね...」

フェイトのアジト

「だあー!あの執務官!ムカつくー!!」

部屋の中ではアルフが暴れていた。理由は後から出てきた執務官に邪魔されたらしいが...

「落ち着けよ。アルフ」

「これが落ち着いて...」

「フェイト寝てるから」

「...ごめん」

フェイトは落雷の魔法の直撃をくらい、眠っている

「.....」

口には出していないがライト自身かなりイラついている。足の動き

が止まらなく、摩擦で床から煙が出ている程だ

「ライト……」

「なんだアルフ？フェイトが寝てるから……」

「床……燃えるよ」

「……悪い」

「……」

「……」

再び沈黙が空間を支配した

「……」

「……」

「……なあアルフ」

ビクッ

「な……なんだい？」

「……プレシアの攻撃はジュエル・シードを確保するためなのか？それとも……フェイトを狙ったのか？」

「……それは……」

アルフは答えることが出来なかった
真実を知っているのに

「……ジュエル・シードを確保するためだよ」

「フェイト!？」

アルフの代わりに答えたのは眠っていたハズのフェイトだった

「…起きて大丈夫なのか? フェイト」

「うん。もう平気だよ。」

「それで…本当にフェイトを狙ったわけじゃないんだな?」

「うん…私が近くにいたから当ててしまったんだと思う。だから母
さんを悪く思わないで」

フェイトはそう答えるが、どこか辛そうな表情だった

「…わかった。フェイトを信じるよ」

「ライト…!」

「ただし…」

「…!？」

ライトの言葉にフェイトは一瞬明るくなるが、ライトはそれをさえ
ぎった

「今すぐ休め」

「へ!?!」

ライトから言われた一言は意外なもので、間の抜けた声が二人から出た

「今日は異常なまでに魔力と体力の消費が激しいんだ。今は体を休める事が重要だ。」

「あのくアタシも?」

「当たり前だ」

「ねえフェイト…ライトってさ、ちょっと過保護っぽくない?」

「うん…ちょっとね…」

アルフとフェイトはヒソヒソと小声で話していたが…

「聞こえてるぞ」

「?!?!?!」

「誰が家政婦だつて?」

「言っていない!過保護だとは言ったけど家政婦とは一言も言っていない!ちよつ…ライト!?黒い笑み浮かべながら近づかないで!怖い!怖い!イダダダダ!痛い!痛い!頭割れる!やめて!アイアン

クローやめてえええ!!」

アルフはもがきながら悲痛な声をあげていた

「（アルフ…頑張つて…）」

それをフェイトは遠い目で見ていた

「本当に来るのかい？」

「ああ。そろそろ顔出しておかないとな」

「……………」

「どうした？フェイト」

「え？ううん…大丈夫…」

「そうか？もしもキツかったら…」

「体の方はもう大丈夫だから心配しないで」

「なら良いけど」

「それじゃ転移するね」

フェイトは自身の作り出した転移魔法を発動し、三人は転移した

「でっけ…」

ライトたちは現在の庭園の中を歩いていた

「こんなデカいのをフェイト達だけで使ってるのかよ。スゲーな」

「そ…そうかな」

「ああ！こんなデカいの見たことねえよ！！」

ライトはただ一人ハイテンションだった

「スゴい喜びようだね…」

「あはは…まあ記憶が無いから珍しいんじゃないかな？」

二人はライトを呆れ見していた

「ねえライト、この中見てまわってくる？」

「えっ…と…なんで？」

「だって、もの凄くはしゃいでたから」

「俺…そんなにはしゃいでた？」

『「」「」「」』

「全員で肯定しなくても…」

「ライトが分かりやすくね」

『ポーカーフェイス弱すぎてワロタw』

「デステイニーは黙ってる」

「とにかく！行ってきてよ。ライト」

「でもフェイトの母さんに会わないと…」

「ちょっと母さんと2人で話さないといけない事があるから！」

「…？フェイト…何か隠してないか？」

「い…いや！全然！」

「でも…『行きましょう！マスター』ちょ！デステイニー！引っ張るな！っ！かお前人引っ張れるのか！？」

『ついさっき気づきました』

「おおい！止まれ！！止まれえええ！！」

ライトの影はデステイニーに引っ張られていくにつれて小さくなっていった

「ねえフェイト…本当に行かせてよかったの？」

「どうして?」

「どうしてって…アタシはフェイトと精神リンクしているんだよ! ?どうしてそんなに1人で抱え込もうとするのさ!?!」

「そっか…アルフもツライんだね。ゴメンね」

「どうして…!」

「大丈夫…もう悲しまないから。もうツライと思わないから」

「フェイト…」

「行こう。母さんが待ってる」

「……………」

フェイトとアルフはライトとは別の方向に歩いていった

時の庭園通路

「ちよっ…離せ!とにかく止まれ!…」

『ハイ!何ですか?』

「だあ!?!」

デステイニーが急に行動を止めた為に、ライトはバランスを崩し倒れてしまった

「てめえ…わざと止めただろ…」

『いえいえ気のせいですw』

「その笑いに耐えた言い方ムカつく…」

『A H A H A H A!』

「…そんな事より何でフェイトから離れた？」

『あれ？スルーですか？つまりn「デステイニー？」すみませんでした。本当にすみませんでした。お願いですからそのドライバーし
まってください』

「…まったく」

ライトはそう言いながら何処からか持ってきたドライバーをポケット
トにしまった

『フェイトさん…あのままでしたら理由を絶対に話しませんでした
よ』

「だったら何で離れたんだよ」

『ワタシたちが居なくなれば良かったのです。フェイトさんは恐ら
く自分で抱え込むタイプですから、あのままワタシたちが居てもあ
の場から動かなかったでしょうし。それであれば一旦離れて後をつ
けるのが得策でしょう』

「…うん…言いたい事はわかった…」

『でじょっ？じゃあフェイトさんを追いかけてしょう！』

「どっやって？」

『…はい？』

「いや…だからどっやって？」

『…それは…頑張ってる』

「……………（イラッ）」

ガガガリガリガリッガリガリガリッ

『ちよっ！ドリル！電動ドリルだめ！痛ッ！死ぬ！！本当に壊れるからヤメテエエエ！！？！』

ガチッ…

「…ここも鍵がかかってる」

『スゴいですね〜こんな広いのにロックをしっかりとっているなんて』

「てめえはさっさとフェイトかアルフの魔力探ってる」

『やってるんですけどね〜周りから微量な魔力が無数にあってわからないんですよ』

「そういえば何か無駄に鎧みたいな置物多いよな」

『夜な夜な動いているのでは?』

「どこの幽霊屋敷だよ」

『いやいやわかりませんよ?何処からかいきなりドゴーン!!て爆発音が……』

「ないない」

『なんでですか』

「ここは管理局にバレてないってフェイトが言ってたし、もし起こったとした「ドゴーン!!」……ら……」

ライトが話していると何処からか爆発音が響いた

「どつちだ!?!」

『この通路を進んだ先です!』

「この扉だけ開いている?」

『中からフェイトさんの魔力反応があります』

「行くっ!」

ライトが奥に進んでいくとフェイトが寝かされており、横の壁は壊されていた

「フェイト!？」

フェイトの体は鞭が何かで打たれたような後が無数にあった

「このマントは…アルフの？」

「ん…んう…」

「フェイト!大丈夫か!？」

「あれ?…ライト…どうしてここに?」

「どうしてじゃねえよ!爆発音がして慌てて来たら部屋が壊れてお前が倒れてるから…」

「そう…なんだ…あれ?これ…アルフの…」

フェイトは自分にかけていたマントに気がついた

「ライト…アルフは?」

「見ていない…」

『残念ながらアルフの魔力反応は感知できませんでした』

「そんな…」

「フェイト…一体誰がこんな事を…」

すると壊れた部屋の中からゆっくりと黒い髪の女性が出てきた

「だれだ？」

「母さん…」

「なに！？」

奥から出てきたのはフェイトの母プレシアだった

「アンタがプレシアか？」

「あら？アナタがフェイトに協力しているっていう子？」

「そうだ」

「アンタに聞きたい アルフはどこに行った」

「ああ…あの使い魔なら逃げていったわよ。もう怖くなったって」

ライトの目には怒りが現れだしていた

「デステイニー…バスターソード」

『しかし…！』

「バスターソード…！」

『…わかりました』

ライトは銃剣のデステイニーを上投げる。そして落ちてくるときには身の丈ほどの刀身のある大剣となって目の前に刺さった。

「最後に…フェイトにこんな仕打ちをしたのはお前か？」

プレシアはフツと笑った。

「ええ、そうよ。だったら何？」

「……」

地面に刺さったデステイニーを抜き肩で担いだ。

「質問は終わり？それじゃあ早くジュエル・シードを…」

「黙れよ」

「あら？何かしら？アナタはフェイトの協力者何でしょう？だったら早く白いのから奪って…」

「黙れって言うてんだクソババア！！」

ライトはプレシアに切りかかった。

しかしプレシアはいとも容易く防護壁で防いだ。

「全く…いきなり切りかかってくるなんて、礼儀のなっていない子ね！」

そのままライトを弾き飛ばし、壁にぶつける

「ガハッ……」

「これでわかったでしょう？私に楯突こうなんて考えたって……」

「だから……どうした……」

「……なに？」

「だから……どうした！……！」

その瞬間ライトの中で何かが弾けた

「オリヤアア！……」

ガキンッ！

「フン……まだあま……」

ピシッ……

「なっ……」

バキンッ ザシユッ

「くっ……」

「母さん……！」

ライトの打ち込んだ一撃はプレシアの防護壁を砕き、腕を斬りつけた

「力だけはあるみたいね……」

「うぐああああ!!」

再びライトが大剣を構え接近してきた

「でも動きが単調で力任せ……まるで獣ね」

「な……」

プレシアは素手でガシツとデステイニーを受け止め、横に流す。

まだ大剣の重さに慣れていないライトはそのまま体のバランスも崩して倒れてしまった

「う……クソツ!!」

ライトがプレシアの方を向くと手に魔力を溜めていた

「母さん止めて!!」

「よく見ておきなさい、フェイト。プラズマランサー・ファランク
スシフト」

ライトの目の前で放たれた魔法は逃げる猶予もなく爆音と共にライトを飲み込んだ

「ライトオオオ!!」

煙が徐々に晴れていくとライトはボロボロになりながらも大剣を杖代わりにして立ち上がった

「ハア…ハア…ハア…」

「スゴいわね。今のなかなかの威力だったのに」

「うっせ…んだ…よ…クソ…ババア…」

ライトはなんとか言い返すも、いつ倒れてもおかしくない程にフラフラしていた

「ライトも…もうやめて…」

『そうです！ここは一時退却しましょう！』

「嫌…だ…」

フェイトらが逃げるように言ったがライトは真っ直ぐプレシアを見て断った

「ここで…逃げ…たら…誰が…フェイトの…事を守…るんだよ…」
『しかし…!』

「決めたんだよ…俺が…フェイトを守るって…!」

「へえ…立派な心掛けね。ヘドがでそうだわ」

「なっ…」

気がついたと目の前にはプレシアがいた。そしてライトの頭を掴み持ち上げた

「がっ…」

持ち上げられると同時に大剣を落としてしまった

『マスター!!』

「止めて…母さん…」

「フェイト…よく見ておきなさい。母さんの邪魔をした男の末路を」

プレシアはライトを掴んだ手に魔力を溜めだした

「止めて…」

ドンッ…

「ガッ…」

「止めてよ…母さん…」

ドンッ…

「ガハッ…」

ライトは魔法をくらう度に小さい悲鳴を上げながら小刻みに動いていた

ドンッ…

「ガフッ…」

ドンッ…

ドンッ…

ドンッ…

そしてついにはライトの悲鳴も聞こえなくなり小刻みに動いていた体も動かなくなった

「あら…動かなくなったわね…それじゃあ終わりにしましょうか」

プレシアは掴んでいるてに再び魔法を溜めだした

「さようなら、フェイトの騎士さん」

バシユツと放たれた魔法は、そのままライトを壁に叩きつけ、壁に打ちつけられたトマトのようにグシャツとライトの血が広がった

「いや…嫌…イヤアアアアア！！」

フェイトはその光景を見て、目を隠し涙を流していた

『ライト！…！』

大剣状態のデステイニーはすぐさま自信をスタンバイ状態の腕輪に戻し、ライトの腕に取り付いた

「ハア…ハア…ハア…」

『（まだ息がある…だとしたら生き長らえられるハズ…どこか転移出来る場所を…）』

デステイニーはライトがまだ生きている事を確認すると転移魔法を展開し、プレシアに気づかれぬように念話を飛ばした

『（フェイトさん…）』

「（デス…テイニー…ライトが…死ん…）」

『（彼はまだ死んでいません！彼は…ライトは私が必ず生かします！…だから少しの間だけ待っていて下さい）』

「（デス…テイニー？）」

『どこか…治療出来る場所に…転移！』

その瞬間部屋を銀の閃光が包む。

光がおさまると、ライトの姿は無くなっていた

「まったく…無駄な魔力を使わせてくれたわね」

「……………」

フェイトはただライトの血が溜まっている場所を見ていた

「いい？フェイト。母さんは、母さんの邪魔をする奴を殺したの。」

そして使い魔も逃げてしまった。必要ならもっと優秀な使い魔を用意するわ。だから…あの白い子からジュエル・シードを奪ってきなさい」

「……………」

「フェイト？」

「はい…母さん…」

フェイトはただ力無く答えた
ライトの血溜まりを見ながら

?????

どこかの空間を銀の閃光が包み込んだ。
光が消えると血だらけで横たわっているライトの姿があった

「おい！大丈夫か！？」

「……………」

慌てた少年の声がこだまするもライトは返事をしなかった

「マズいな…早く担架の用意を！！」

「わ…わかった！」

「（フエイ…ト…）」

自分の周りで騒ぐ声が聞こえるがライトはそのまま意識を落としてしまった

第七話 離別

ジャムおじさんとバタコさんは妖精（後書き）

作者「未来を切り開く!!」

ライト「すみません。ついにアホ作者が壊れました」

作者「こらこら勝手に廃人扱いするな!!」

ライト「したくもなるだろ!!なに?前回のお仕置き完全無視!?
半年弱もなにやってたんだよ!!」

作者「リアル生活（キリッ）」

ライト「……（ニコッ）」

作者「ギヤアアアアア!!裂ける!!手の指の間裂けるUUUU!!」

ライト「オラオラ!お前の血は何色だああああ!!」

作者「ギヤアアアアス!!!!」

しばらくお待ちください

ライト「あゝスッキリした」

作者「本当にすみませんでした（血文字）」

ライト「あれ?もう終わり?んじゃまた次回!!」

作者「次回こそ頑張って早く書きます（血文字）」

ライト「あつまだ死んでなかったのか。向こうの部屋で続きするか
（作者の足首を掴んで扉に向かう）」

作者「タスケテー（血文字）」

第八話 保護 どうしよう…サブタイのネタが思いつかない(前書き)

ふはぁ…受験勉強の合間を使って書いてたら半年かかった…

もう受験いやだ〜、〜、

第八話 保護 どうしよう…サブタイのネタが思いつかない

???

インライト

「あれ…?」

……えっと…研究所?どこかで見たような…あっ!

「またこの夢か…」

あゝあ…同じような夢を見るってストレスでも溜まってんのかな?
まあ良いや

「ど〱せ、この夢の中じゃ何にもさわれないし、寝る!」

一度はやってみたかったんだよね。夢の中で寝てみるって

〱それからしばらくして〱

「おかしい…」

眠れない…何故だ!ここが既に夢の中だからなのか!?しかも結局
同夢から覚めないってど〱ゆ〱こと!?

「あゝヒマ。なにこれ、行動しないとダメな感じ?」

とか言っても行動する気は無いんだけど

カサツ…

「ん？」

そこの草むら動いたよな？

「誰かいるのか？」

そこの草むら動いたよな？

「誰かいるのか？」

はっきり言って動くの面倒なんだよな…これでウサギとかの野生動物だったらくすぐりまわすぞコラ

とか言つてたら人影が見えてきたなぐんだ…人だったのか…って！

「白っ！！？」

髪の毛は白、肌も白、服も白…白すぎんだろ！
これホントに人？

「人形じゃねえのか？」

頬引っ張ったらわかるかな…？

『ライト…』

「うおっ！？」

「しゃ…喋った！？喋ったよこの人！？」

『ライト…あなたはまだここにいたのですか？』

「…へ？」

「ここに？夢の中って事？」

『あなたはこんなところに居るべきではありません』

「…いや、俺も好きで居るんじゃないんだけど…」

『…なら早く現実に戻りなさい。あなたを待っている人がいるですよ』

俺を待っている人？誰のこと…って！なに草むらの中に戻ろうとしているんだよ！

「ちょ…ちょっと待てよ！どうやって戻ればいいんだよ！それに俺を待ってる人って…」

んでその白い人はスルーして草むらの中へ…オイイイ！？

「なっ！てめ！ちょっとま…て…よ…」

前見た時と同じように体に力が入らなくなってきた…くそっここで

覚めるのかよ…

(ライト…)

え…？何で頭の中に声が…フェイトの声…？

(ライト！)

フェイト…

そのまま俺の目の前は真っ暗になった

「(う…く…あれ?)」

体に感覚が戻ってきた…

それにしても…この天井知らないな…

「(フェイトのマンションじゃない…どこだ?…どうしてこんな場所…)」

たしか…フェイトと時の庭園に行って…プレシアと会って…そうだ
!!

「フェイト…!!」

「うおおおうめ?!?!?!」

「え?」

起き上がったらずシンという音がした
横には椅子から落ちた女の子が……どんな状況？（汗）

「え〜と…?」

「く…クロノ君！艦長！！は…早く誰かきてええええ！！？変態が
ああああ！！！」

「へ…変態!？」

すると外からか、人が走ってくる音が聞こえてきて、勢いよく扉が
開かれた

「エイミー！何があった!？」

「く…クロノくん…変態が…（グスッ）」

『あ、起きたんですね、マスター』

「あ！デステイニー！どこに行ってたんだよ」

『いえ…この人達に事情を説明してまして…』

「な…なんで動けるんだ!？」

「この前の執務官!」

あれからしばらく経って執務官　クロノから俺が眠っていた間の事を聞かされた

「なるほど…それで管理局の船にいるのか」

「ああ、こちらはデステイニーから大体の事情を聞いている」

「そっか。あ、あとエイミー…だっけ？人を勝手に変態扱いするな」

「あ…あはは〜ゴメンね」

先ほど変態と叫んだ少女・エイミーは苦笑いしながら謝ってきた
いくら上半身が包帯だけだからって変態は酷すぎる

謝ればなんとかは要らないって言うだろ！……とところでなんとかって何だろ？

「さてと…」

状況もわかったし、デステイニーも返してもらったし、ここにいる必要も無いな

「それじゃ、俺はそろそろ行くよ」

「ちょ…ちょっとまって！そんな傷だらけの体でどこに行くつもりだ！？」

うるさいな…力を入れて人の肩を掴むなよ

「フェイトを助ける。それに…」

腕の包帯を外して見せつけてみた

「!!!?」

「傷ならもう治った」

「うそ…なんで!? 瀕死の状態だったのに」

エイミイが驚愕の声を上げる
やっぱり知らなかったんだな

「俺の体は特別なんだよ」

「だが！傷が治ったとしても今のままでは返り討ちにあっただけだ！
！」

「それでも行かなきゃいけないんだよ。アイツを…フェイトを守る
って決めたんだから」

「ライト…」

「じゃあな、世話になったよ」

とりあえず部屋を出た

にしても、すっげー不気味な艦だな

下から照らしてるなんて

「デステイニー、バリアジャケット」

『了解です』

さすがに病院服みたいな格好のままだと恥ずかしいからな。やっぱりバリアジャケットにしておかないと…

「…なんか違うよな？」

『わかります？』

なにこの「ちょっと味付け変えてみたんだけどわかる？」的な言い方かなりイラッとした
じゃなくて、今までの騎士みたいなバリアジャケットが某赤毛の我が儘親善大使の服（へソ出しはしていない）みたいになっていただけ

「前のバリアジャケットはどこいったんだよ」

『あれですか。修復するのが面倒なんで破棄しました』

軽っ！バリアジャケットってそんな簡単に破棄していいのかよ！

『ちなみにそのバリアジャケットは私に元々インストールされていたものです』

もう…どうでもいいや

「あつ！ライト君起きたの！」

軽く凹んでいたら、栗色のツインテール……なのはだったな。なのはがいた

「なのはか…おかげさまでな」

「どこ行くの？」

「ちょっと野暮用で…ってなんで服を掴んでんだ？」

なのはが俺のバリアジャケットを掴んで離そうとしないですけど…

「だって、独りでどこかに行くんでしょ？」

「あ…あだから離してくれない？」

「いやなの」

「…え？」

とりあえずもう一度……え？

「とりあえず部屋に戻るの。話はそれからなの」

「あの…なのはさ」早く入るなの「…はい」

…もう……どつにでもなれ

「　　」

「なあクロノ…」

「なんだ？」

「これは流石にやりすぎじゃないか？」

現在の状況　なのはの手により医務室のベッドに紐……ではなく、
ロープで縛り付けられている

……どここの拷問……じゃなくて人体実験？

「悪いが僕にはどうする事も出来そうにない」

「マジかよ……」

「それよりも君にはいくつかの質問に答えてもらいたい」

そう言うとクロノはアンケート用紙らしき紙を取り出した

「質問の前に助けしてくれない？ロープが食い込んで血が止まりそう
なんだけど……」

「…まず最初の質問だか」

「無視か、無視なんだなコノヤロー」

…もう泣きたい！

「とりあえず質問は終わりだ」

あれから数時間 正確にいうと2時間48分だ

「…（ガクガク）」

なのはに縛られたまま質問責めにされて…もう…血が止まってる気がする…

「ライトくん顔が真っ青なの」

「質問が多すぎて疲れたか？ なのは今は寝かしておいてやろう」

「わかったの」

「たの…むから…ロープ外し…て…（ガクッ）」

そして数日が経過した

「ヒ〜〜マ〜〜だ〜〜…」

『17秒です』

はい！今とてつもなく無駄なことしてるって思った人！挙手！
意外とキツいんだよ！これ

「なかなか20秒の壁は越えられないな…」

『そうでしょうか？…マスターの年齢の肺活量からしますと問題ない結果だと想いますが』

「いやいや…そんな誰が決めたか分からない数値なんて超えたいじゃない？」

『まあ超えたところでどうにかなるわけでもないんですけどね』

「それを言うなよ…」

なんやかんやでさらに数日

「…今日で何日だ？」

『一週間です』

「あゝ早く外にでないと…」

あれから残りのジュエル・シードはアースラにいるのは達によりすべて封印され、12個となった

元々21個であったジュエル・シードは現在、管理局12個でフェイト…もといプレシアに9個ある。

つまり、これから先は直接的な争奪戦になるわけだとなると、逃げ出すタイミングはこの決戦時になる

「…フェイト」

しかし、その時フェイトは全力で奪いに来るだろう

アースラも全勢力を出してくるに違いない
そうなるフェイト一人では、まず勝ち目が無い
俺も傷ついたフェイトを連れて逃げ切れるわけないしな

『考えはまとまりましたか？』

「……全然」

すると突然モニターが開いた

【ライト！】

「……うるさい。今考え事してるんだよ。少し黙っ……」

【……フェイト・テストロッサの使い魔が見つかった】

「……なんだと!?!」

アルフは俺がプレシアと戦っていた時には既に姿は無かった
最悪プレシアに消されていたとも思っていたけど……

「……本当なんだろうな？」

【ああ、なのはの友人が道で傷ついて弱っているところを保護した
そうだ】

「……それで、今から話せるか？」

【……少し待て。しばらくしたら繋ぐ】

「わかった」

モニターが開くとそこには腹部を包帯で巻いた狼姿のアルフの姿があった

【…ライト？】

「アルフ！良かった…無事で」

【だいぶボロボロだけどね】

確かに、治療したと言っても体にはまだ痛々しい傷が残っていた

【アンタも管理局の艦にいらっしゃることはプレシアにやられたんだね…】

「まあ…そうだな」

【それで、執務官？ジュエル・シードはもう全部封印しちゃったんだろ？】

【ああ、こちら側は12個、プレシア側は9個、計21個、もう全て封印されているな】

ジュエル・シードがもう全部封印されている
つまりは、これから直接対決になるわけだ

「フェイト…」

【私が行きます！】

【な…なのは！？】

横からなのはが入り込んできた

【まだフェイトちゃんとお話してないし、決着もつきたいの！】

【しかし負けたらジュエル・シードが…！】

【良いじゃないの】

【か…母さん！？】

緑色の髪の人が出てきた。確か…リンディさん…だったっけ？
つか親子だったのか

【なのはさんがあそこまで言っているんですもの。任せてみるのも有りでしょう？】

【でm【ね？】ハイ、ワカリマシタ…】

【「……………」】

…………え？あ…なにこれ、絶対零度？

急に部屋の温度が下がったよ。温度計にもヒビ入ったし…
なのはも啞然としている。

俺？意識飛びかけた…

【じゃあ、なのはさん頑張ってね】

【は…はい】

【シツカリ、ハナシヲシテコイ】

うわぁ…クロノがまだ直ってないよ…

海鳴公園

inなのは

そして…フェイトちゃんとの決戦の日

早朝にこの公園に来た

特に戦う時間や日にちは決めて無かったけど、今日、この時間、この場所に来るとフェイトちゃんが居るような気がしたの
横にはユーノくんやアルフさんがいる

そしてレイジングハートを起動すると同時にフェイトちゃんが現れた

「フェイト！やめようよ…あんな女の言うことなんて聞かなくて良いよ…」

アルフさんの呼びかけにフェイトちゃんは首を横に振った

「それは出来ないよ。私は母さんの娘だから…」

「フェイト！」

「ゴメンね、アルフ。ジュエル・シード…渡してもらいます…」

フェイトちゃんは自分の持っているデバイスを私に向ける

「フェイトちゃん…私はあなたと話がしたかった…でも、もうそんな暇は無いんだね…」

「……………」

フェイトちゃんは無言で頷く

「わかったよ…それしか無いのなら…」

私もレイジング・ハートをフェイトちゃんに向ける

「賭けよう…お互いのジュエル・シードを…お互いの全てを…！」

「……………」

私は先制攻撃にシューターを4つ飛ばす
でもフェイトちゃんはそれを難なく避ける

『フォトン・ランサー』

「…ッ！レイジング・ハート！」

『プロテクション』

ガキンツ！

フェイトちゃんが飛ばしてきた雷の弾をなんとかプロテクションで防いだ

やっぱりフェイトちゃんは強いな…

でも、負けられない！

アースラ内部

inライト

「……」

フェイトとなのはの戦いが始まった

まだ始まったばかりだからどっちが優勢ってのもまだわからないんだよな

でも…モニター越しからわかる、なのはは強くなった。初めて戦った時と比べるとかなり。さらにフェイトも強い。実際これだけ強かったら俺の手伝いも要らなかつたんじゃないのか…？

何はともあれ、俺のする事は決まっている

座っていたベッドから立ち上がった

『行くんですか？』

「…もうすぐ終わるからな」

そう…もうすぐこの戦いは終わる

海上

inなのは

「バスター!!」

バチィ

「クツ……!アーク・セイバー!!」

ヴォン

「きゃあ!!」

今のは危なかった…ちょっと反応遅かったら当たってたかも…
でもフェイトちゃんの息が上がってきている。もう限界に近いのかな

「つてええ!?!」

何か考えてたら手足を黄色いリングで固定された。確かこれってク
ロノくんが言ってたバインドって言うのだよね
うう…動けない

「アルカス・クルタス・エイギアス…」

え…詠唱？って事は大きいのくるの！？

「…疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけれ」

フェイトちゃんの周りにさっきの雷の弾が無数に出現した
でもこれを耐えれば…

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファラン
クスシフト…」

くる！

「撃ち碎け！ファイヤー！！」

そのまま私は爆発に巻き込まれた

inフェイト

「はあ…はあ…」

私が出る最大の魔法を当てた…
リニス教えてくれたこの魔法…大丈夫、いくらあの子でも無事で
あるはずが無い
勝ったんだよね…？ライト…

「ぷはあ…バインドって時間が経ったら消えちゃうんだね」

「な…」

煙から出てきたのは、ほぼ無傷のあの子だった

何故？魔法はすべて直撃した。どうして？どうして無傷なの？

「次はこっちの番だよ」

「あ…」

しまった…いつの間にかバインドで縛られていた前を見るとあの子の姿は無かった

「(どこに…上!?)」

上…真上からあの白い子が周囲から魔力を集めていた

収束魔法!?

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション!」

早く…早くこのバインドを解除しないと…

「スターライト…ブレイカー!」

バインドが外れた!…でも避けられそうにない。ここは障壁で防ぎきる!

「くう…あ…」

重い…バリアジャケットが衝撃で所々破れてきた。
負けられない…母さんの為にも…私のために死んでしまったあの
人の為にも…!!

パキン…

「あ…」

障壁が砕けた…
負けちゃった…母さん…ゴメンね…ライト…

その瞬間、私は何か温かいものに包まれた感じがした…

inなのは

スターライトブレイカーを撃った衝撃でできた水柱の水しぶきで辺
りは霧のようになっていた
うわあああ〜やり過ぎちゃったよ〜

『なのはちゃん…なんてバカ魔力…』

え…エイミィさん、それは酷いの…
あっ！そうだ

「エイミィさん！フェイトちゃんは？フェイトちゃん無事かわかりますか！？」

『なのはちゃん落ち着いて、今は魔力の余波で感知できないから少し待って』

「はい…」

うう…やっぱりやりすぎたんだ

フェイトちゃんがいたと思われる場所を見ると霧が少しずつ晴れてきていた

……え？あれって…

『あ！余波がおさまってきた…魔力反応は…え！？』

あれは…あの人は…

『魔力反応が…2つ！？フェイトちゃんと…』

「ライトくん！？」

そう、今アースラで保護されているはずのライトくんだった

inライト

ふう…間に合った

いや〜フェイト負けるかもなって思ってたけど、まさかなのは
があんな魔法ぶち込むという発想はなかった
おかげで最大出力で障壁張るはめになったよ
まあフェイトが無事だったから良いけど

「…ライト？」

フェイトは今俺の腕の中で目を丸くしている
そんなに驚いてるのか

「よう久しぶり」

「どうして…死んだはずじゃ…」

ちよ…勝手に殺すな！

「この通り、ピンピンしてるよ」

「でも…あんな怪我をして…」

『それはアナタも知っているでしょう？マスターが簡単に死なない
事を』

デステイニーが言ってきた

つかそれはマスターに対して失礼じゃないか？

「そう…なんだ…良かった…」

フェイトの目に涙が……って涙！？どうして！？俺何かした！？

「フェイト！？なんで泣く！？どこか痛むのか！？どこか悪いのか！？」

「グスツ…違うよ…大丈夫…どこも悪くないから…」

「そ…そっか…よかった」

焦った。うん、かなり焦ったよ

『この涙の意味がわからないというのは、ある意味スゴいですね』

「ホントにね…」

「は？」

どういう意味だよ。それにフェイトも泣き止んだと思ったら落ち込むし…
わけわからねえ

「ラ…ライトくん！」

あれ？なのは居たの？

「それは酷すぎるの」

「冗談だよ。それよりもフェイト」

「あ、うん。バルディッシュ」

『put off』

バルディッシュから9個のジュエル・シードが出てきた

「お前の勝ちだ。受け取れ」

「へ？いや、そうじゃなくて」

む…違う？じゃあなんだ？

「さっきのステ『ラアアアイイイトオオオ！…！』きやあ！？」

うわ…クロノだ。面倒なの出てきたな…しかも怒ってるっぽいし…

『貴様！一体どうやってあの部屋から抜け出した！！』

「ただ転移しただけだよ。しかもそんなに怒鳴っているとか将来老けるぞ」

『黙れ！だいたい誰のせいでこんなに怒鳴っていると思っているんだ！』

「……………誰？」

『キサマアアアア！…！』

ちょ…なにこれ面白い

「リンディさん、母親からして息子の老け顔を見るのはどう思います？」

『…それは……複雑ね…』

『クロノくんの老け顔……………ぷっ…』

『あなた達はああ!!』

あゝ面白かった。これ以上弄んだら本当に老けそうだから止めとこ
そういえば、なのはが何か聞いてきてたな

「ところでなのは、さっきの事だけど…」

「もついいの…」

「そうか？」

何だったんだろ？

「ラ…ライト…」

「どうした、フェイト」

何だろう…フェイトが震えてる

「早くしないと…母さんが…」

「母さん…?……………っ!」

慌てて空を見ると既に雷を溜めている黒い渦が覆っていた

「なのは！早くジュエル・シードを！！」

「え？ええ！？」

もたついている内にプレシアの雷が放たれた
クツ…間に合わない！

「デステイニー！防御を！」

『了解！』

なのはの前に出て防御魔法を張る

バチイ！！

「グツ…」

やっぱり…威力ハンパないな…

「あつジュエル・シードが！」

「なに！？」

黒い渦を見ると、9個のジュエル・シードが吸い込まれていく

「クツ…ソオオオ！」

雷が止むと雲が何事も無かったかのように消え去り、青空が見えて

きた

『…全員帰投しろ。ライト、フェイト・テストロッサ両名ともだ』
クロナから戻ってこいと通信が来た
これ以上は何も出来ないし仕方ないか

「……………」

フェイトは俺にしがみついたまま震えていた
とりあえず管理局の艦に戻らないとな

アースラ、ブリッジ

アースラの中に入ると同時に俺とフェイトは手錠をかけられた
少し扱いが荒くないか？

「さて…ライト、まずは説明してもらおうか」

「セツメー？」

面倒だからアホっぽく受け流してみる
多分エイミィやリンディさんなら拾ってくれるだろう

「ごめんなさいね。こればかりは本職を優先させてもらっわ」

なん…だと…？リンディさんが真剣な顔で言っている

これはさすがにマジで行くしか無いのか…

「はぁ… フェイトを助けるって言う約束を果たしただけ、以上！」

「それで？ どうしてなんだ？」

そこでスルーか！ 本当の理由言ったのに！

「だから理由は言ったよな！？ フェイトを助けるって！」

「どうしてそれが脱走に繋がるんだ！」

「むしろあんな軟禁部屋でフェイトを助ける方法があれば教えてくれ」

「ぐ…」

クロノが黙り込んだ

勝った… w

「フェイトさん、ライト君があなたを助ける為だけに協力していたのは本当なのかしら？」

「は…はい」

リンディさんがフェイトに真偽を聞き、フェイトがそれに頷いた

「それじゃクロノ、この件はこれで終わりで良いわよね？」

「…わかりました」

リンディさんの言葉にクロノが渋々頷く
母親って強いな…

『こちら突入班！これより時の庭園内部に進入します！』

モニターに目を向けると、今まさに時の庭園の突入シーンが始まっていた

「……」

これは…フェイトにはキツいだろうな。自分の母親の捕まる所とか見たくないだろうし

「クロノ…さすがにこれは…」

「わかっている。なのはとライトに任せる」

「うん。フェイトちゃん、ライトちゃんと私の部屋に…」

『プレシア・テストロッサ発見！容疑者確保に移ります』

「！！」

なんとまあ…タイミングの悪い…

フェイトを外に連れ出す前に突入班がプレシアと遭遇してしまった。それにしてもプレシアの後ろのカプセルは何だ？なんか液体がコポコポいつてるけど

『プレシア・テストロッサ、ロストロギアの違法所持及び、違法使

用未遂の疑いで拘束する!」

突入班の局員達はプレシアを囲むように立つ

『なんだ?このカプセルは…』

『アリシアにさわらないで!』

『グハッ』

突然カプセルをさわろうとした局員を吹き飛ばした

『キサマツ!全員攻撃しろ!』

『させない…私のアリシアには誰にもさわらせない!』

『な…ぐあ…!』

突如、モニターの部屋の中を激しい雷が鳴り響き局員達を襲った

「総員、強制帰還させて!早く!」

「了解!」

ブリッジが慌ただしく動く。

それよりもあのカプセルの中は…

「嘘…フェイトちゃん…?」

なのはが驚いた声で言う。

そう、あれは紛れもなくフェイトだ

「かあ…さん…アリシアって…?」

『もう駄目ね。9個じゃアルハザードまで行けるかわからないけど、終わりにしましょう』

プレシアが不敵に笑う

『ねえフェイト?私のお人形…』

「にん…ぎょう…?」

『ええ…お人形。この子の…アリシアの記憶を持って見た目そっくりなだけの人形…クローン生命体…あなたよ、フェイト!』

「クローン?」

「確かにプレシアには娘が一人いた…その子の名前がアリシア・テスタロッサ。そしてアリシアは事故で既に他界している。その時にプレシアは人造生命体の生成の研究をしていた。それがプロジェクトF…いや、プロジェクト“F・A・T・E”」

「…!…!」

フェイト…それはつまり…

『さすが管理局ね。確かにその子、フェイトはプロジェクトFの産

物。でも研究は失敗だった』

「失敗だった？」

『ええ。せつかくアリシアの記憶をあげたのにその子はアリシアじゃなかった。』

「……………（ギリツ）」

「コイツ…歪んでやがる…」

『それにねフェイト。私はアナタの事が…』

『大嫌いだったのよっ！』

「…！」

「フェイト！」

プレシアの言葉を聞いたフェイトはそのまま倒れた

「フェイトちゃん！」

「……………」

駄目だ、完全に気を失っている…

「プレシア・テストロッサ…」

『あら？その声は…確かライト君だったかしら？良く生きていたわね。致命傷に近い傷を負わせたはずだけど』

「悪いな…俺は簡単には死なない体質なんだよ」

『そう、それは良かったわね。あなたもお疲れ様。あんな人形の手伝い、大変だったでしょう？』

「うるせえよ…テメエはフェイトを傷つけた。だから…」

『…だから何？』

「…だからテメエをぶっ飛ばす！！」

『クスッ…アハハハハハ！！面白いわ！良いわよ！やってみなさい』
『！』

「か…艦長！モニターを見てください！」

エイミイが慌てて別モニターを出す

そこには熱源反応らしきものが無数に出現していた

『待つてるわよ。不死身の少年』

「……………」

プレシア…フェイトの為にアイツは絶対にぶっ飛ばす！
…その前にフェイトを

「…なのは、フェイトは？」

「まだ…」

まだ意識が戻っていないみたいだな

「バルディッシュ」

俺の呼びかけにバルディッシュは光を発して反応した

「……………フェイトの事を頼むな」

バルディッシュはもう一度、光を発した。

それにしてもこの手錠邪魔。手錠に雷の魔力を流すと軽く爆発して外れた

さて、行くかな

「ま…待て！ライト」

またクロノが肩をつかんで止めてきた

「…なに？」

俺、今機嫌悪いんだけど…

「お前だけ行かせるか。僕も行く」

クロノ…

「わ…私も行くよ！」

なのは…

「僕も！」

ユーノも…

「わかった。行くぞ！」

「ちょっと待ちなさい」

またかよ…！

つて振り向いたらもの凄く目が笑っていない笑顔のリンディさんがいた…

…今ので頭が軽く冷えました

「全く、あなた達は…現場には私も行きます。あと現場の指揮はク
ロノが執りなさい」

「了解です！」

「エイミー、転移座標を時の庭園に」

「了解です艦長！お気をつけて。みんなもね！」

時の庭園

「これは…悲惨だな…」

クロノが目の前にいる無数の機兵の群れを見て顔がひきつっている

「ユーノくん、何体いるの？」

「……60位で数える気が無くなったよ」

60ね…軽い

「デステイニー、バスターランチャー」

『了解です』

デステイニーを宙に投げると、先端に刀身のついた巨大なライフルが落ちてくる

それを両手で受け止め、機兵の端に剣先を向ける

「ライト…何をやる気だ？」

「見てろ」

ガコンツという音と同時に先端の刀身が二つに別れ、中から砲口が現れた

『チャージ開始』

「ライトくん！敵が…」

砲口に魔力を溜めていると機兵が魔力を感知して動き出した事を教えてくれた

でもこの動きじゃ遅すぎるな

『95…96…99…100！チャージ完了』

「Xバスター・アンリミテッド！」

ジュッ

砲撃を発射すると砲口先にいた機兵の一部は破壊…いや蒸発した

「…おりゃあ！」

ランチャーを端から端までなぎ払うように動かすとその範囲内にいた機兵は全て形を残さずに蒸発した

「「「……（ポカーン）「「「

後ろで三人が驚いていた

「何やってんだ。行くぞ」

「あ…ああ、そうだな」

「行くよ、なのは」

「ふえ？ま…待ってよユーノくん…」

時の庭園 玉座の間

「アリシア……」

プレシアはただ一人、玉座の間で自分の娘、アリシアのカプセルを見ていた

「ゲホツ…ゲホツ…ガフツ……時間も残り少ないみたいね……」

自分の体を蝕む病の状態を見て、プレシアは限界を悟っていたのだ

「終わる…いえ、終わらせるのよ…この思いも…すべて……」

第八話 保護 どうしよう…サブタイのネタが思いつかない(後書き)

作者(以下:作)「来年もよろしくお願いしますノシ」

ライト(以下:ラ)「早い!早すぎるから!半年ぶりに更新していきなり年末の挨拶って!!」

作「だって今年中にはもう更新無理っばいから!」

ラ「そこは威張るな!」

作「受験生は…辛いな」

ラ「悟るのも禁止!つか作者、受験生なら勉強しろよ。センター近いのに」

作「だが断る!」

ラ「ダメだコイツ、何とかしないと…」

作「まあ…次話が今年中に完成すれば更新しますが、リアルがもの凄く忙しいので見込みが薄いです。という訳で少し早いですが良いお年を!(そのまま逃走)」

ラ「あ、作者!ではまた次回!……待ちやがれ!クソ作者あああああ!!!(追いかける)」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0105n/>

魔法少女リリカルなのは 異世界から来た少年

2011年12月18日10時56分発行